

大 県 南 遺 跡

—山下寺跡寺域の調査—

1985年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市平野・大県・大平寺・安堂一帯の東山地域は古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての時期に河内の中枢部であったところから、古墳、寺院址、官衙跡、集落跡等の多数の重要な遺跡が存在する。今回の発掘調査の結果、飛鳥時代末に建立したと考えられる山下寺跡の寺域の一部を確認することができ、多量の遺物が出土した。さらに、調査区東側に寺院の主要伽藍の存在が予想される。

宅地造成が遺跡に与える影響は大なるものがあり、今後、東山をどう利用するかという問題と含めて地域開発と埋蔵文化財の保存、活用をどう一体化していくかが、課題となろう。

昭和60年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、高井興産株式会社の宅地造成に伴って実施した柏原市大県4丁目所在の大県南遺跡の事前緊急発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和57年5月6日から7月31日まで実施した。
3. 発掘調査は、柏原教育委員会、社会教育課嘱託、花田勝広（現在滋賀県野州町教育委員会）が担当した。
4. 遺物整理は、花田・西原清美・広岡 勉を中心として行い、上条裕典・井宮好彦の協力を受けた。実測図には、瓦類に限って番号の前にKを付けた。
5. 本書の編集は、花田が行い、執筆は、花田・広岡・西原が担当した。
6. 調査の実施・本書の作成に際して、国祭仏教大学教授 藤沢一夫、奈良大学教授 水野正好、八尾市教育委員会 山本 昭の諸先生の他に、奈良文化財研究所 大脇潔氏、泉 雄二氏、藤田広幸氏、中西克宏氏らの御指導・助言を賜わった。
7. 調査協力者は、下記の通りである。

竹下 賢、北野 重、安村俊史

麻 栄三郎、朝田行雄、井上岩次郎、奥野 清、川端長三郎

岸本重夫、玉野正一、西岡武重、分才春信、道篠基藏、森口喜信

山田貞一、山本芳一、坂井利和、佐藤 崑、藤沼敏則、山下裕司

山中 茂、石田成年、清水外松

大塚淳子、松田光代、山内 都、苅野絹子、松岡由紀子、竹下彰子

竹下典江、峰谷直子、藤岡弘子、大谷麻弓、及一敏恵、松成早苗

村口ゆき子

（敬称略）

目 次

| | | |
|-------|--------------|-----|
| はしがき | | |
| 例 言 | | |
| 第1章 | 調査経過 | |
| 1. | 調査に至る経過..... | 1頁 |
| 2. | 調査経過..... | 1頁 |
| 第2章 | 位置と環境 | |
| 1. | 歴史的環境..... | 2頁 |
| 2. | 山下寺について..... | 5頁 |
| 第3章 | 調査概要 | |
| 1. | 地区設定と層序..... | 6頁 |
| 2. | 造 構..... | 8頁 |
| 3. | 遺 物..... | 13頁 |
| 第4章 | 結 び | |
| 1. | 造構の変遷..... | 31頁 |
| 2. | 瓦類について..... | 32頁 |
| 土器観察表 | | |

挿 図

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 第1図 周辺の遺跡 | 第15図 1号墳の土器 |
| 第2図 智識寺東塔心礎・礎石実測図 | 第16図 土器実測図 |
| 第3図 山下寺跡の地形図 | 第17図 土器実測図 |
| 第4図 地区設定図 | 第18図 土器実測図 |
| 第5図 第1遺構面遺構図 | 第19図 土器実測図 |
| 第6図 第2遺構面遺構図 | 第20図 土器実測図 |
| 第7図 建物1・ピット群遺構図 | 第21図 土器実測図 |
| 第8図 古墳地形図 | 第22図 炉壁実測図 |
| 第9図 1号墳遺物出土状況 | 第23図 フイゴ実測図 |
| 第10図 大県1号墳石室実測図 | 第24図 石鍋実測図 |
| 第11図 軒丸瓦の分類 | 第25図 金属製品・土製品・石器実測図 |
| 第12図 軒平瓦の分類 | 第26図 軒丸瓦第Ⅱ型式の分布 |
| 第13図 丸瓦実測図 | 第27図 遺構の変遷図 |
| 第14図 鶴尾実測図 | |

図 版

- | | |
|-------------------|--------------------------------|
| 図版1 遺構 土層図 | 図版15 遺構 溝1・溝2・土塀2 |
| 図版2 遺構 土塀実測図 | 図版16 遺構 土塀4・Pit・出土状況 |
| 図版3 遺構 溝実測図 | 図版17 遺構 溝2羽釜出土状況・2次堆積層 |
| 図版4 遺物 軒丸瓦実測図 | 図版18 遺構 整地層 |
| 図版5 遺物 軒丸瓦実測図 | 図版19 遺構 各種の遺物出土状況 |
| 図版6 遺物 軒丸瓦実測図 | 図版20 遺構 1号墳全景・遺物出土状況 |
| 図版7 遺物 軒平瓦実測図 | 図版21 遺構 谷状遺構 |
| 図版8 遺物 平瓦実測図 | 図版22 遺構 土塀4 |
| 図版9 遺物 平瓦実測図 | 図版23 遺物 瓦類 |
| 図版10 遺物 平瓦実測図 | 図版24 遺物 瓦類 |
| 図版11 遺物 平瓦拓本 | 図版25 遺物 平瓦・土器・土塀4出土 |
| 図版12 遺構 調査区全景 | 図版26 遺物 土器 |
| 図版13 遺構 調査区全景・土塀1 | 図版27 遺物 土器・土製品・有舌尖頭器 鍛冶関連遺物 |
| 図版14 遺構 建物1全景・建物1 | |

第1章 調査経過

1. 調査に至る経過

高井興産株式会社は、柏原市大県4丁目419番地(約2,000m²)に宅地造成を計画した。この計画は、丘陵斜面を全域にわたって、1.5mほど削平し、中央部にY字状に道路を設置し15軒分の宅地を造成するものである。宅地造成予定地は、生駒山地西麓の標高32~40mに位置し、大県南遺跡・山下寺跡と目される周知の遺跡であるため、高井興産株式会社は、文化財保護法、第57条-2に基づき「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届出書」を昭和57年3月17日付で提出し、これを受け、柏原市教育委員会は高井興産と協議に入り、調査を開始した。

調査は、昭和57年5月6日~8日に申請地内に2×2mの試掘坑を8ヶ所設定し、試掘した。その結果、遺物包含層が全域で検出されたので、全面調査を5月9日より実施することになった。また、調査中、平尾山古墳群に含まれる古墳が1基、検出された為に保存のための計画変更について、協議を実施したが、古墳が道路部分に位置し、保存を断念せざるを得なかった。調査費は、昭和57年5月10日に覚書交換を行い、高井興産株式会社が7,787,000円を負担し、重機の協力を受けた。また、調査中、又は終了後に集中豪雨のため、近接する地主である高井次郎氏や北口辰夫氏に多大な御迷惑をかけたが、文化財調査に対して理解・協力していただいた。

2. 調査経過

調査は、申請地を北側(500m²)、南側(1,000m²)に区分し、2回に分けて実施した。本調査は、まず南側を重機によって表土層を50~60cmほど掘削した。調査区内からは、試掘結果の通り、飛鳥~奈良時代の瓦が多量に出土した。特に中央部のE5・E6・F5・F6グリッド内で土塙・溝跡を検出した。北側の調査は、7月10日より南半分を埋め戻し、重機によって北半分の盛土・表土を除去した。その結果、掘立柱建物群とピット群が検出された。また、中央部に谷状遺構が存在し、土器・瓦が多量に出土した。北半分の調査区を500m²にした理由は、調査区南側に個人住宅が隣接しており、残土を高く盛ると土砂が流出すると思われたためである。

第2章 位置と環境

1. 歴史的環境

柏原市東方の東山丘陵は、生駒山地南端部に位置し、高尾山（標高 277m）を最高峰とする南北に走る山地である。古代の大和川は、石川との合流点より北上し、現在の柏原市上市・清州・河原町内を流れている。この東山丘陵と大和川に挟まれた東西 500m、南北 3 km の地域に旧石器時代から各時期の集落址 7ヶ所、寺院址 6ヶ所が存在する。この生駒山地西南麓と云うべき地域内の縄文時代から奈良時代の環境を、近年の新発見の事象を含めて簡単に記載する。

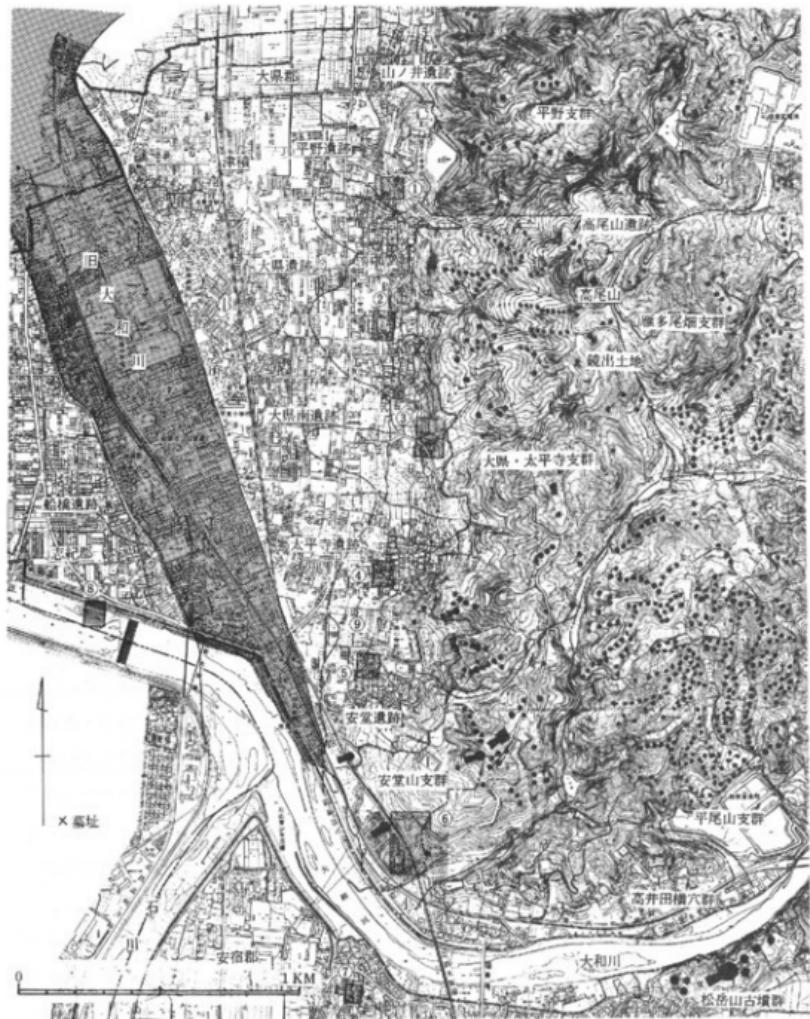
平野部の集落は、生駒山地から谷川によって形成された谷口扇状地や扇状地性低地上に立地する。その扇状地は、北側より山ノ井・平野・大県（北扇状地）・大県（南扇状地）・大県南・太平寺・安堂の 7ヶ所を根幹としている。これらの地域は、生駒山地の花崗岩風化土壌が厚く堆積しており、その深さは一様でないが地表より 2~5 m 前後である。

縄文時代の遺跡は、大県（北扇状地）に立地し、竪穴住居址の柱穴と見られるピットや土塙^(註1)等の遺構が確認されている。遺物は、縄文前期を除く各時期の土器類や石器類（石匙・石頭・石鎌）、紡錘車など多量に出土している。このように大県遺跡は、押型文土器の早期の段階から晩期まで集落が継続的に営なまれていたと推察される。また、周辺に恩智遺跡（北へ 1.5 km）・旧大和川対岸の船橋・国府遺跡（南西へ 1~1.3 km）・本郷遺跡（西へ 1 km）が点在する。

弥生時代になると、大県遺跡（前期～後期）以外の各扇状地や扇状地性低地上に山ノ井遺跡（中・後期）・大県南遺跡（後期）・安堂遺跡（中期）が出現する。これらの集落址は、大県遺跡を母村として核とした子村である可能性が高く、弥生中期には、ほとんどの扇状地が集落として利用されているようである。また、背後の東山山麓や山頂には、高地性集落があり、高尾山遺跡（標高 250m）、平野山遺跡等が確認され、弥生中・後期の土器や石器が多量に出土している。さらに高尾山遺跡南 200m の地点で多銅細文鏡が単独出土している。

古墳時代前期の遺構・遺物は、大県（南扇状地）遺跡で検出されているのみで、現段階では実態が明らかでない。中期末から後期になると大県遺跡（南扇状地）では、鍛冶炉・炭層に伴って、多量の鉄津・フイゴ羽口・砥石が出土した。^(註2) 炉址に接して掘立柱建物が検出され、鍛冶工房址と考えられる。さらに遺跡の範囲も広く、南北 130m、東西 210m となり、河内における最大級の「鍛冶集落」と云うべき状況である。

東山・生駒山地は、古墳時代前期から後期にかけての各時期の古墳が約 1400 基が認知される。これらの古墳は、前方後円墳・前方後方墳・円墳があり、立地・形態・内部構造により大別して、4 グループからなる。A グループは、生駒山地最南端に立地し、大和川を眼下に見下せる安堂山古墳群である。従来より、河内地方の前期古墳中、古相と考えられ前方後円墳 3 基・

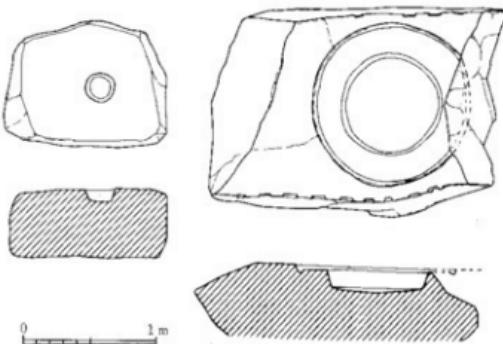


第1図 周辺の遺跡

前方後方墳1基・円墳1基より構成される。Bグループは、平野・大県遺跡東方の東山丘陵上に分布する平尾山古墳群の大県・太平寺支群である。小前方後円墳を含む約200基からなる古墳群で内部構造も木棺直葬・横穴式石室を中心とした葬法である。時期は、5世紀中頃から7世紀前半まで継続する。特にこのグループを特徴づける副葬品に鉄津が認められ、将来的には平尾山支群と同支群を分離し、同支群が生駒西南麓の集落に住む人々の墓域とすることが可能であろう。また、太平寺支群内の駿下南中学校周辺の古墳調査で、7世紀後半～8世紀代の羽筆棺・土器棺・蔵骨器などを納めた墓地として利用されていたことがわかり、この推測を裏付ける。Cグループは、平尾山古墳群の雁多尾畠・平尾山支群で、約1200基からなる円墳から構成される。

内部構造は、横穴式石室・小石室・横口式石棺があり、白石太一郎氏が示す河内平野の有力家父長層の同族集団墓と考えられる。時期は、6世紀前半から7世紀前半の約100年間の短時期に限られる。Dグループは、内部構造が横穴に限られる無墳丘墓の高井田横穴古墳群である。横穴は、2～3基を単位としたグループに分類でき、有力家父長層の消長を示すものと考えられる。平尾山の石室墳とは、造墓占地が分離されており、6世紀から7世紀初頭に築造される。

飛鳥・奈良時代になると、各層状地に付着して、三宅・大里・山下・智識・家原・鳥坂寺跡の寺院が建立される。これらの寺院は『統日本紀』孝謙天皇、天平勝宝八年の条にみられる寺「智識・山下・大里・三宅・家原・鳥坂等」と云ういわゆる「河内六寺」である。この内で、堂塔・寺域の一部が明らかなものに鳥坂・家原・智識寺跡がある。寺院の詳細な内容は、柏原市史「第2卷」に譲り、ここでは寺院の変遷を記載する。柏原市内の寺院は、船橋廃寺跡を除くと建立時期が3期に区分される。Ⅰ期は、生駒西南の大県郡の三宅寺・大里寺・山下寺・智識寺・家原寺・鳥坂寺と安宿郡の原山廃寺で7世紀中葉に建立が開始される。Ⅱ期は、安宿郡の片山



第2図 智識寺東塔心礎・礎石実測図

廃寺・五十村廃寺・田辺廃寺・円明廃寺で7世紀末～8世紀に建立された1群である。Ⅲ期は、河内国分寺・国分尼寺で8世紀中葉に建立された1群である。

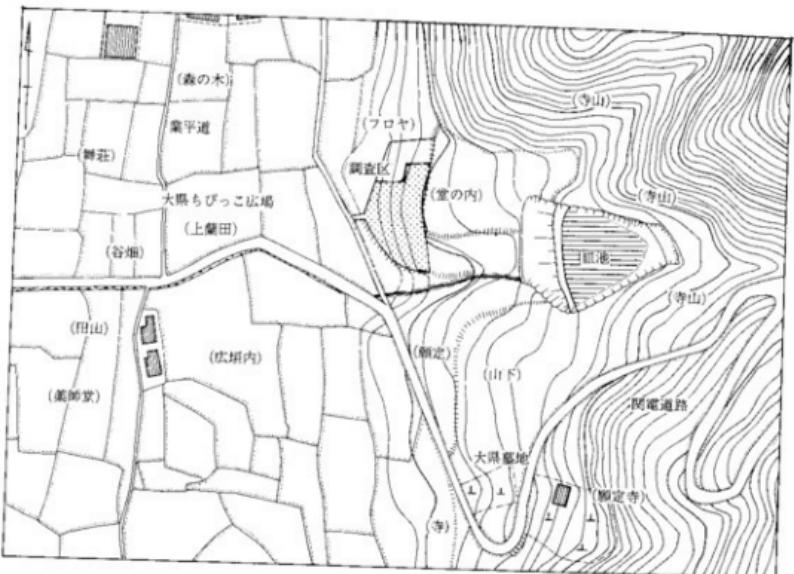
このように市内16ヶ所の寺院は、生駒西南麓の集落を母体として大県郡を中心で寺院が建立された段階(Ⅰ期)、安宿郡を中心に寺

院の建立が開始された段階（Ⅱ期）、聖武天皇の国分寺建立と周辺の寺院が整備された段階（Ⅲ期）の3つの画期が認められる。また、寺院以外にも、新たに文献資料に現われる智識寺南行宮跡、河内大橋、津積駅家、大県郡衙等の遺構も同地域内に存在することが知られる。

2. 山下寺について

山下寺は、『続日本紀』の記載以外には、文献資料がなく寺域の推定は困難である。したがって、字名等の地名や瓦の散布地などの考古学的手段にたよらざるえない。従来より、山本昭氏による踏査と地名により、大県墓地下の扇伏地上に位置すると考えられた。しかし、松岡良憲氏によって、素弁8葉連華文の軒丸瓦と縁軸丸瓦が岩崎谷川北側の字「堂ノ内」内にて採集されており、寺域がさらに広範囲になると示唆された。また、柏原市立豊下小学校には字「堂の内」出土とされる忍冬文軒丸瓦が所蔵されている。

現段階では、寺院の主要伽藍が岩崎谷北側の字「堂ノ内・山下」周辺、または、南側の大県墓地下の扇状地に位置するかは、寺域を考える上で最重要課題である。



第3図 山下寺跡の地形図

第3章 調査概要

1. 地区設定と層序

1. 地区設定

申請地中央部に南北50m、東西30mの調査区を設定した。地区割は、申請地が東から西へ傾斜地であるために、斜面に沿って区分した。したがって、割付北は、磁北よりN-11°-Eとなる。遺物の取り上げは、1辺 5×5 mの小グリットを最少単位とし、各グリット西南隅の交点をグリット名とした。例えば、Dラインと3ラインの交点ならば、グリット名は、「D 3」となる。また、実測図中に示した座標は、全てこの標示に基づいた。

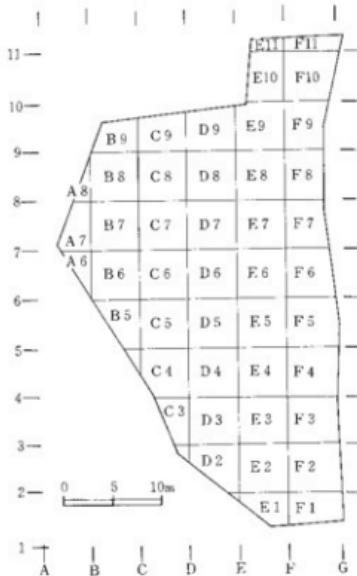
2. 層序と遺構面

調査地は、第2章で述べたように東山丘陵の西斜面に立地するため、基本的な層序は一様でない。そこで調査区東側の最上段(E 4-E 11・F 4-F 11)を基本的層序として把え、その堆積状況について、順を追って以下に記述する。

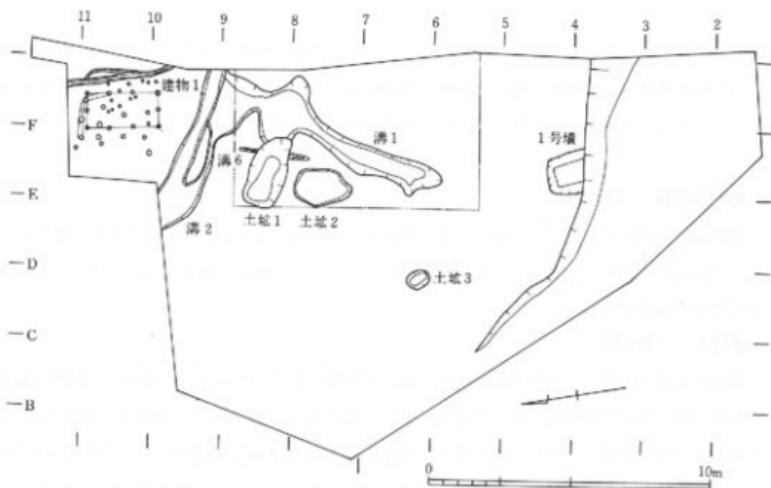
層序は、図版1で示す通り上層より耕土・灰褐色砂質土・暗灰色土・黄褐色砂礫土(地山)の順で堆積する。

遺構面は、2面あり黄褐色土上面(第1遺構面)と黄褐色砂礫土上面(第2遺構面)である。

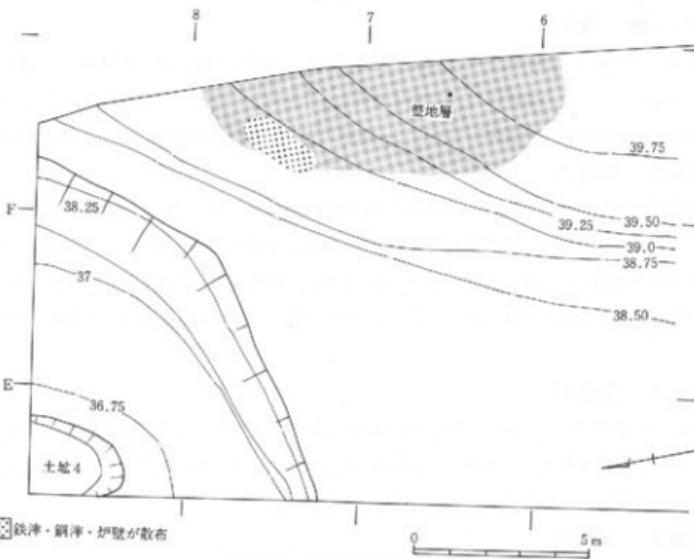
なお、灰褐色砂質土・暗灰色土は、鎌倉時代から室町時代の多量の瓦器・瓦質土器・土師器陶器・瓦を含む中世の堆積層で、黄褐色土・明黃灰色砂質土・暗灰色砂質土は、須恵器・土師器・瓦を多く含む飛鳥時代から奈良時代の遺物包含層である。



第4図 地区設定図



第5図 第1遺構面遺構図



第6図 第2遺構面遺構図

2. 遺構

遺構面は、黄褐色土と黄褐色砂礫土をベースとした2面が確認できた。ここでは、黄褐色土上面を第1遺構面、黄褐色砂礫土上面を第2遺構面とした。検出した遺構は、掘立柱建物1棟、ピット40ヶ所、土塙4ヶ所、溝跡5ヶ所、古墳1基、谷状遺構1ヶ所がある。

第1遺構面（第5図）

遺構は、掘立柱建物、ピット群、土塙、溝がある。東西に走る溝2を挟んで北側に建物1とピット群があり、南側に溝1・土塙1~3がある。さらに、横穴式石室を内部主体とした大県南1号墳を検出した。

建物1（第7図）

調査区北側に位置し、梁行2間、桁行3間の南北棟である。柱穴は、直径30cmの円形の掘方があり、柱穴内に根石を据える。柱間は、梁行1.5m、桁行2mを測る。建物1の南側には、焼土層があり柱穴を覆っていた。焼上層は、南北4m、東西2.6mで梢円形を呈し、厚さ15cmである。さらに層内より、炭化物・炭・壁土・焼土塊が多量に出土した。建物の時期は、柱穴内より瓦質土器が出土しており室町時代初期頃と考えられる。

ピット群（第7図）

建物1の周囲で大小40個のピット群を検出したが、建物1の様に単一の遺構として組み合うものはない。ピットの平面形は、円形又は隅丸方形を呈し、直徑10~25cm、深さ20~30cm前後を測る。埋土は、いずれも明灰褐色土で、少量の瓦質土器が出土した。

土塙1（図版2）

調査区中央部に位置し、溝6と切り合い関係があり、溝6を切っている。形態は、長径2.7m、短径1.3mで梢円形を口し、深さ30cmを測る。埋土層は、上層より淡灰褐色土・灰褐色土・明灰褐色土の順で堆積している。遺物は、淡灰褐色土層内に細片となった丸・平瓦が多量に出土した。

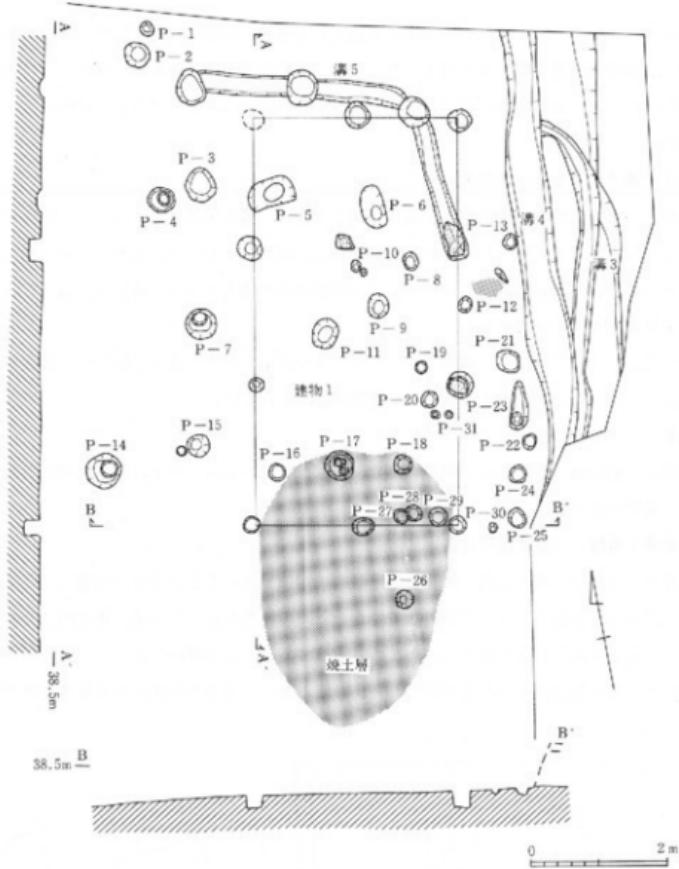
時期は、瓦質土器の火鉢・鉢や瓦器の皿(92)が出土しており、室町時代初期頃と考えられる。

土塙2（図版2）

土塙1の南側にあり、長径2.7m、短径1.3mの梢円形を呈し、深さ10cmを測る。埋土は、單層で明灰色土が堆積する。遺物は、土師器の皿(96)と羽釜(97)が出土した。時期は、共伴土器より室町時代に比定できる。

土塙3（図版2）

土塙1・土塙2の位置する地点より南西方向へ8m離れた部分で検出された。形態は、長径



第7図 建物1・ピット群遺構図

1.8m、短径1.3mで梢円形を呈し、深さ40cmである。埋土は、上層に灰褐色砂質土、下層に明褐砂質土が堆積する。遺物は、鉄釘が1本底面直上より出土した。

溝1 (図版3)

整地層と土塙2の間に位置する幅1.3~2.5m、長さ11m、深さ30cmほどの細長い溝である。埋土は、明茶褐色砂質土の単層で土師器の皿(93)、瓦質土器の鉢(94)が出土した。時期は、出土した土器により室町時代と考えられる。

溝2 (図版3)

ピット群と土塙1・土塙2の間にある東西溝である。規模は、幅0.8~1.2m、長さ10mで深

さ70cmを計測した。埋土は、上層が明灰褐色土、下層が灰褐色砂質土が堆積する。遺物は、須恵器・土師器・瓦質土器・瓦が出土した。また、溝の西側部分で完形品の羽釜(91)内に土師器の皿(80~90)が13個体が内包されていた。土器の性格は、不明であるが室町時代初期のものである。

溝3・溝4・溝5 (第7図)

建物1の東側に位置する南北溝が溝3・溝4である。溝3・溝4は、切り合い関係があり、溝3が先行して存在していたと思われる。溝3は、幅30cm、長さ5mを測り、明灰褐色土が堆積する。溝4は、幅40~50cm、長さ7mで、明褐色土が埋土となる。遺物は、溝3・溝4内より、少量の瓦質土器が出土した。

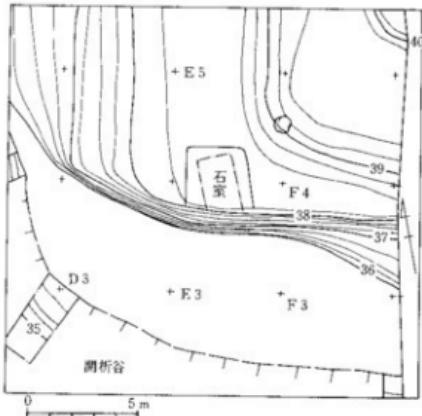
溝5は、L字状に折曲し、溝内でピット1~3が検出された。溝は、幅30cm、長さ6mで細長く深い。埋土は、明褐色土が堆積し、遺物は認められない。

溝6

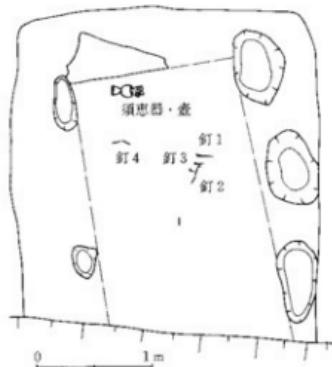
規模は、幅30cm、長さ5mの細長い溝で、土塁1と切り合う。埋土は、淡灰褐色土の単層であり、遺物は認められない。

大県南1号墳 (第8図~10図)

調査区の南側は、東から西へ傾斜する尾根の先端部であったが、近世の開墾により削平され、人頭大の花崗岩がわずかに露出していた。周囲の精査を行った結果、集石内より石敷きを検出、さらに鉄釘の存在も認められたため、古墳であることが併明し便宜上、大県南1号墳と名付けた。墳丘部は削平されて不明であり、破壊が著しく周溝の検出も不可能な状態であった。



第8図 古墳地形図



第9図 1号墳遺物出土状況

石室は、造存状況が悪く、わずかに内面へ転落した奥壁と側壁の抜き取り穴を検出した。これによって内部構造は、奥壁幅1.5mの南に開口した無袖の横穴式石室と考えられ、石室の掘方に対して石室の軸は18°西へ傾いている。床面には、20~30cmの石が敷きつめられている。

さらに石敷きを除去したところ石室の主軸にあたる部分で奥壁より80cm南側から開口部に向って、地山を掘りこんだ幅10cm、深さ8cm、断面U字形を呈する排水溝を検出した。

遺物は、石室内より須恵器の壺1個体と鉄釘4本が出土している。

第2造構面（図版6）

第1造構面を検出した段階で6グリット以南は全て黄褐色砂礫層（地山）となっており、第2造構面の存在するのは、7グリット以北に限定される。第2章で記載した事情により、下層部分を調査したのはD7・D8・E7・E8・F7・F8の6グリットである。検出した造構は、土塙、谷状造構、整地層である。

土塙4（図版2）

調査区の中央部の谷状造構内で検出された。形態は、北・西部が未調査なので確定しがたいが、東西2.5m、深さ45cmを測る土塙と考えられる。埋土は、上層より暗黄褐色砂質土・暗青灰色粘土・暗灰色粘質土の順で堆積する。遺物は、暗青灰色粘土と暗灰褐色粘土から、土師器（1~30）・須恵器（30~50）・瓦・鉄津（図版27）が多量に出土した。時期は、出土遺物より7世紀末から8世紀初頭頃と考えられる。

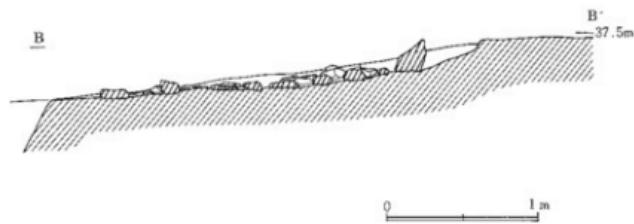
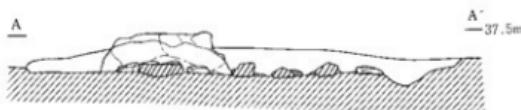
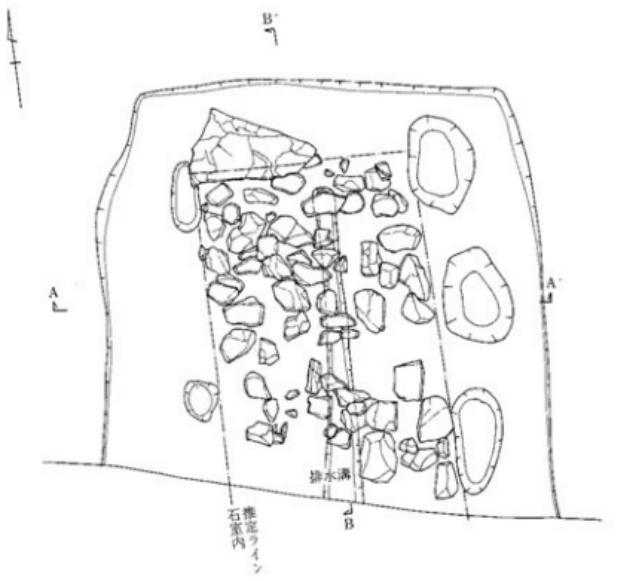
谷状造構（図版6）

第2造構面で検出された埋没谷で、幅13m（調査区内の東西幅）を測る。深さは、第1造構面のE6グリットで標高38.5m、埋没谷の最も深い部分36.75mを測り、比高が1.75mある。

谷の開析する方向は、北北東と考えられる。谷の堆積土は、上層より黄褐色土（67~73・76~77）・明黄灰色砂質土・暗灰色粘質土の順である。遺物が最も出土したのは明黄灰色砂質土であり、土師器（51・63~66）・須恵器（52~62）・瓦（K1~K3・K5・K37・K39・K40）が出土した。谷の埋没完了時期は、上面に第1造構面があり、建物・ピット群が13世紀末~14世紀頃と考えられる事より、それよりやや先行する12世紀から13世紀前半頃と考えられる。また、谷内に土器類や瓦類をまとめて投棄はじめるのは、7世紀中葉以降である。

整地層（図版1）

層の広がる部分は、F5・F6グリットを中心南北13m、東西2.5mの範囲で、茶褐色砂質土・暗灰色粘質土などの層が、10~20cmの厚さで交互に積まれている。また、層内の地山直上より須恵器（74・77・78）とフイゴ羽口・鉄津・銅津（図版16・27）が出土した。



第10図 大県南1号墳石室実測図

3. 遺物

今回の調査で出土した遺物量は、コンテナ（縦40cm×横60cm×高さ20cm）348個分である。

その内容は、瓦類が最も多く317箱、土器が30箱、金属器と鉄滓が各1箱である。瓦類は、大半が中世以降の削平で2次堆積したもので、その数は301箱となる。

遺物の種類は、土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器・陶磁器などの土器類、軒瓦・平瓦・丸瓦・鷲尾などの瓦類、刀子・釘などの金属製品、フイゴ羽口・銅滓・炉壁など小鋳造関連遺物、石器・土製品等がある。また、各遺物の詳細な内容は一部観察表に示した。

(1) 瓦類

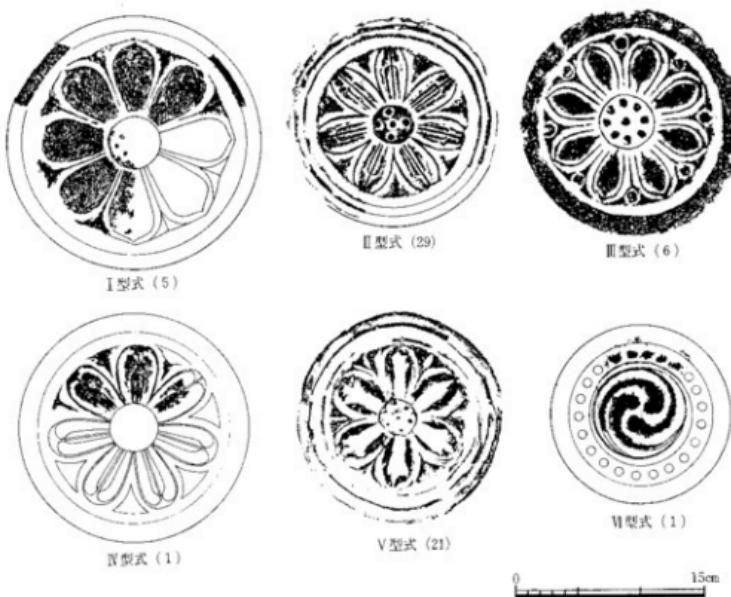
瓦類は、軒丸瓦62点、軒平瓦9点、鷲尾3点、綠釉丸瓦のほかに平瓦・丸瓦がある。これらの遺物は、谷状遺構出土のもの（K1～K3・K5・K37・K39・K40）を除くと全て鎌倉時代末から室町時代の遺物包含層に混入していたもので、原位置を留めていない。その層名は、灰褐色砂質土（K4・K6～K9・K11・K13・K14・K16・K17・K19～K28・K29～K32・K38・K41～K49）と暗灰色土（K10・K12・K15・K18・K33～K36・K50～K59）である。

a. 軒丸瓦 (図版4～6)

瓦当の文様によって、蓮華文5種と巴文1種類に分類できる。その内で最も多く出土したのは、Ⅱ型式・Ⅲ型式のもので35個体ある。

Ⅰ型式（K1～K5） 素弁八葉蓮華文。中房は概して小さく、低い凸形を呈し、蓮子は小粒で1・5・10を配する。花弁は薄肉で広く長い素弁である。外縁は、低く細い直立縁の素縁となっている。蓮弁相互の間に間弁を配置し、それぞれの蓮弁を区画した形態である。瓦当部の厚さは薄い。瓦当部と丸瓦部との接合方法は、瓦当裏面に丸瓦をあて、その上に薄く粘土で覆っている。瓦当裏面は接合のためナデ調整によりすり消されている。胎土は2～3mm以内の長石・石英を含み、焼成は良好である。色調は淡灰色及び黒褐色を呈する。出土数は5個体ある。

Ⅱ型式（K6～K12・K15） 単弁7葉蓮華文。中房は小さく、1・4の蓮子を配し、蓮弁中の弁央に稜線を通し、細線によって縁取りしている。さらに、先端には返りをつけ、各弁ごとに高く隆起した子葉を配す。蓮弁の間には逆三角形の間弁がある。外縁は高く幅が広い直立縁で、3重圓文を飾り外縁から第2縁が太い。瓦当部と丸瓦部との接合は、瓦当裏面に溝をほりその部分に丸瓦をあて、その上下を薄く粘土で覆う。さらに、それ以前に丸瓦先端を取りし、その切断面及び丸瓦下面の瓦当部接合面に「かきべら」によって連続したX型の刻み



第11図 軒丸瓦の分類

を付けて、両面が密着しやすいうるようにする。胎土は、2~3mm以内の長石・石英・雲母を含み、焼成は良好である。色調は青灰色及び茶褐色を呈す。出土数は29個体である。

III型式 (K13・K14) 単弁八葉蓮華文。比較的大型の中房内に1~8の大きな蓮子を配する。蓮弁中には、大きくあらわされている子葉をおき、あたかも大少の蓮弁を重ね合せたようしている。間弁は、蓮弁全体を大きく包み、間弁中央には珠文を8個配する。外縁は平縁で幅広く高い。瓦当部と丸瓦部との接合は、瓦当部に溝をほりそこに丸瓦をさし込み、さらにその上に粘土で覆う。胎土は、4~5mm以内の長石・石英・雲母粒を含み、焼成は良好。

色調は茶褐色を呈す。出土数は6個体である。

IV型式 (K16) 単弁八葉蓮華文。各弁ごとに子葉をおき、II型式よりやや肥厚する。蓮弁相互には逆三角形の間弁を配する。中房・外縁及び接合方法は、破損のため不明である。瓦当部の厚さは2.7cmと厚い。胎土は3mm程の石英・長石粒を多く含む。色調は灰色。焼成は良好。出土数は1個体である。

V型式 (K17~K26) 忍冬六弁蓮華文。小型で中房に1~6の蓮子を配する。蓮弁中に回る忍冬文を配す。從来まで知られている忍冬文は、蓮弁上に凸形に作られているが、今回出土した瓦は凹型に作られている。特異な例である。忍冬文の3葉と萼は意識的に作られているが、

型式化しており硬く直線的である。範の作りはやや粗雑で、範を彫った際の痕跡を各所に留める。間弁は、逆三角形のふくらみがあり、中心に切り込みを入れている。外縁は、広く中高の直立縁で細い3重圓文で飾っている。瓦当部と丸瓦部の接合は、Ⅲ型式と同様の方法でⅡ型式と同様の連続したX型の刻みがみられ、接合粘土は比較的薄い。胎土は2mm以内の石英・長石粒を含む。焼成は良好、色調は淡灰色を呈する。丸瓦部の凸面には繩目叩きを持つものが数点認められる。出土数は21個体である。

M型式 (K27) 三巴文。巴は左に巻き込む。珠文帶の内外には圓線があるが、巴文の尾端部はそれと接着しない。巴の頭部は円形で文様全体が小さく、範の彫りは深い。外縁内区の珠文の個数、外縁外区及び接合方法は破損のため不明である。胎土は粗い長石・石英・クサリ礫を少量含む。色調は淡灰色、焼成は良好である。出土数は1個体。

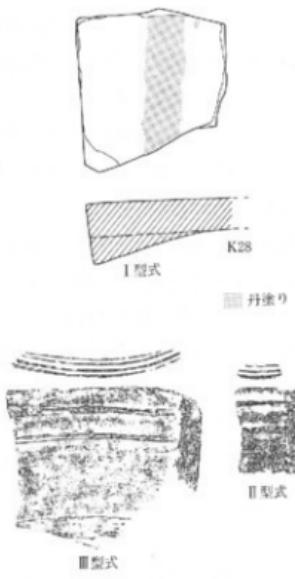
b. 軒平瓦 (図版7)

瓦当文様によって、素文のもの (I型式)、重弧文のもの (II型式・III型式) があり、3型式9個体出土した。

I型式 (K28) 素文。瓦当部の厚さは4.7cmと厚く無段階をなす。凹面は、糸切りの際に横方向に引き切った痕跡の上に布目が認められる。凸面は、ヘラケズリの後に丁寧な横方向のナデによってすり消されており、飾面から5.5cmの所に約3cm幅で朱が付着している。瓦当部は、平瓦の凹面に粘土を貼って厚くし顎とする。胎土はほとんど砂粒を含まず、良質粘土を用いている。色調は淡灰色、焼成は良好である。出土数は、4個体が認知される。

II型式 (K32・K34) 3重弧文。沈線の形は、凸面側が太く、他の2線の幅は同じである。凹面には、丁寧な横方向のナデ調整が施されており、約1cm幅の2本の凸帯がみとめられる。その凸帯は飾面からもう1本は2cmおいて平行に配される。この凸線は刻目があり、軒下から見上げた時に見える飾りとして、意識的に施されている。胎土は3mm以内の凝灰岩粒が少量含まれる。色調は灰褐色、焼成はやや不良。

III型式 (K29~K31・K33・K35・K36) 4重弧文。瓦当面は幅2~2.5cmでその中に幅5mm、深さ2mmの沈線を施している。沈線は、ほぼ一定でそれを引



第12図 軒平瓦の分類

く際に用いた原体の痕跡が凸面先端部に残る。凸面には、丁寧なナデ調整が施され、Ⅱ型式と同様に平行した凸帶が認められる。K29・K36はこの平行した凸帶が3本ある。K30は、先端が凹線を呈する原体を用いて作られており、飾面から約6cmのところに段をなす。また、飾面の重弧文は2度施された痕跡があり、文様を右から左へ施文されたことを示す。胎土は、ほとんど砂粒を含まないが、少量の凝灰岩が認められる。色調は淡黄灰色・淡青灰色の2種類が認められる。焼成は良好。

c. 丸瓦 (第13図)

K57は、行基式で長さ38cm、厚さ2cm前後。胎土は、密、長石、石英粒を含む。焼成は良好。色調は灰白色を呈す。凸面は、4本/cmの繩目叩きの後、丁寧なナデ調整。凹面は9本/cmの布目を残す。

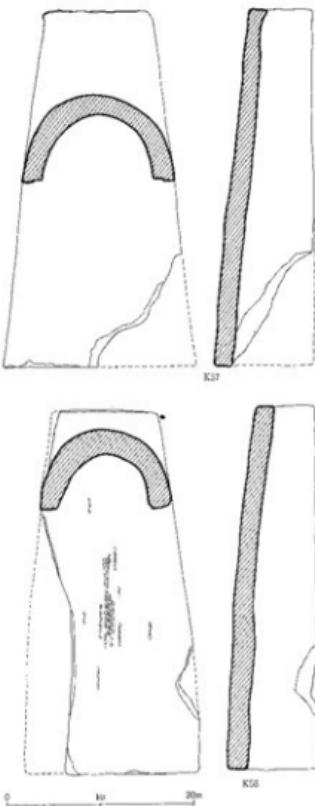
また、製作の際の側面調整はヘラ切りで2分割する。K58は、行基式であり長さ38cm、厚さ2cm。

胎土は、やや粗、石英・長石・雲母を多く含む。焼成は良好、色調は青灰色を呈する。凸面は、3~4本/cmの繩目叩きの後に丁寧なナデ調整。凹面は、3~4本/cmの布目を残す。側面には、分割の際に内面にヘラによる半截面が認められる。分割は瓦の半乾燥段階で2分割されたと考えられる。

丸瓦は、良好な資料が少なく、調整も丁寧であるため分類が困難であるが、形態、胎土によって少なくとも4種類に分類できる。大部分の丸瓦が繩目叩きであるが、平行叩きを施す小片も認められる。胎土も大別して、長石・石英・クサリ礫を含む1群と雲母・長石・石英を多く含み、色調が青灰色又は茶褐色を呈する生駒西麓産の一群がある。また、少量であるが玉縁式の丸瓦が認められる。K58は、軒丸瓦Ⅱ・Ⅲ型式のものや平瓦C類と同一胎土であり同一生産工房の製品と考えられる。

d. 平瓦 (図版8~11)

平瓦は大量に出土しており、出土遺物の大半を



第13図 丸瓦実測図

占める。その大部分が破片であるため、法量の不明なものが多いが、叩き目によって大別すると5種類に分類が可能である。

A類（K38）は凸面に幅4mmの平行叩き目を施す。叩きの原体は、木目に平行して溝を彫る。凹面は、10本/cmの布目痕で幅2.5cm～3cmの模骨痕が残る。側面は桶巻きの際の分割截面が認められる。胎土は、3mm前後の大粒の石英粒を少量含む。色調は明赤褐色。B類は、斜格子目叩きで格子の太いもの（K41・K38）と細いもの（K39・K40～K43）の2種類が認められる。

K39・K40は、1.5×1cm前後の格子目を有する幅8cm前後の原体で斜方向に叩き施す。凹面は、10本/cm前後の布目痕、幅3cmの模骨痕を残す。胎土は、やや粗、長石を少量含む。乳灰色。K39・K41～K43は、0.6×0.5cmを有する斜格子目、幅5～6cmの原体で斜方向に叩く。凹面は、10本/cm前後の布目が残り、さらに幅1.5～2.5cmの模骨痕が認められる。胎土は2mm以内と長石・石英粒を含む。色調は青灰色～明灰色を呈する。側面は内面にヘラ切り痕があり、外面に分割の痕跡が認められる。C類（K44～K49）は、凸面に有軸の接杉叩き目が施される。その原体は幅11×10cm前後である。凹面は7本/cmの布目、幅2.5×3cmの模骨痕を残す。側面は桶巻きの際の分割截面が認められる。胎土は2mmの石英・長石・雲母を多量に含む。色調は焼成温度によって青灰色～茶褐色を呈する。量的に最も多く、D類（K54～K56）は、凸面に7本/cmの繩目叩きを施した後に原体をジグザグに再び叩く手法である。凹面は、7本/cmの布目を有するもの（K55）やナデ消し（K56）がある。焼成は良好。色調は青灰色～暗青灰色を呈す。厚さは2～2.5cm前後で比較的厚手のものが多い。E類（K53）は、凸面に繩目叩きを平行に叩き施す。凹面は、7本/cmの布目が残り四隅に布の褶の痕跡があり、一枚造りと考えられる。側面は断面形が三角形を呈する。胎土は2mm以内の長石・石英を含む。色調は青灰色～赤褐色を呈する。

これらの瓦は手法から、A・B・C類が模骨痕、側面調整から桶巻き造りと考えられる。E・F類は、側面調整・凹面に模骨痕が認められることや布目の褶があることから、一枚造りと思われる。D類は、側面の分割半截断面のヘラ切分割痕が認められないものが多くあり、一枚造りの可能性が高い。

瓦の年代は、2次堆積内の出土品が多く決定し難いが、わずかに谷状造構出土のものがある。谷状造構出土のものは、A類（K37）とB類（K39・K40）で軒丸瓦I型式のものと共に伴しており、出土土器より7世紀第2四半期に製作されたと考えられる。また、C類は、軒丸瓦II型式のものと同一胎土で7世紀中頃をやや下った段階に製作された可能性がきわめて高い。D類は製作年代が明らかでないが、柏原市片山廃寺跡・鳥坂寺跡・東条尾平廃寺跡に類例がある。^(注4)

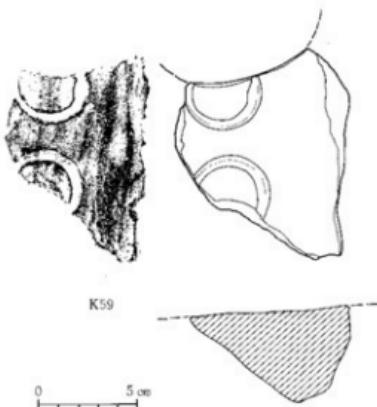
E. 鶴尾（第14図）

3点あるが同一個体である。左側面、半円形透し部分を残す。この部分は縦帯の破片で外面

にヘラ削りが施され、直徑4cm、深さ4mmの輪郭のみを陰刻した円文が残っている。また、破片左側には、切り込み痕跡があり、下端に降り棟上の丸瓦を納める半円形の透し穴の痕跡がある。厚さは0.4mm、胎土は0.2mmの石英を多量に含み、焼成は硬質。色調は、淡灰褐色を呈する。

F. 緑釉丸瓦

3×3cm大的破片で、凸面に緑釉がみられ凹面に5本/cmの布目痕を残す。胎土はほとんど砂粒を含まず。色調は明灰色を呈す。出土地点は、E 8区灰褐色砂質土である。昭和46年松岡良憲氏の採集品（柏原市史 第4巻）のものと胎土が類似しており、同一個体の可能性が高い。



第14図 鶴尾実測図

(2) 土器類

土器類は、コンテナで30箱ほど出土している。大別して、古墳時代後期から奈良時代のもの、鎌倉時代末期から室町時代のものがある。前者のものは、大県南1号墳・土塙4・谷状遺構内より出土したもので、後者は、第1遺構面に伴う灰褐色砂質土・暗灰土などの遺物包含層と溝1・溝2・土塙1・土塙2より出土したものである。

a. 古墳時代後期～奈良時代の土器

一括資料は、土塙4と谷状遺構の明黄灰色土層内より出土した土器群がある。他に一号墳出土品と谷状遺構を覆う包含層出土のもの（67～73・75～77）、整地層内出土のもの（74・78・79）がある。遺構ごとに順を追って記述する。

1号墳 （第15図）

石室内に残された土器は、台付長頸壺が1個体である。頸部は、細長く直立し、口縁部は少し外反気味で、端部は内弯している。体部の肩は棱をなし、二条の凹線をめぐらす。脚部には3方に1段透しを穿ち、底部には外方へ踏張った脚部が付き、上方に一条の凹線をめぐらす。

時期は、6世紀末～7世紀初頭のものである。

土壙4 (第16～18図)

器種は、土師器（1～30）と須恵器（31～50）がある。土器量は、コンテナ4箱分あり代表的な器形を図示した。

土師器 器種は、杯A（1～5・14～18）、杯B（19・20・21）、杯C（6～13）、皿A（22～24）、蓋（26）、高杯（25）、甕A（27）、羽釜（28）、鉢A（29）、鉢B（30）がある。なお、図示したもの以外に多数の杯・皿の破片が出土している。

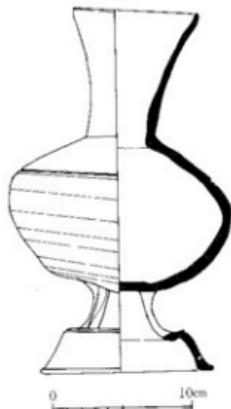
杯Aは、内面にラセン暗文+2段放斜暗文、又は1段放斜暗文を付けたもので、口縁部外側にヘラミガキをする。法量によって、口径18～19cm前後、器高5～6cmのもの杯A I（14～18）、口径10～12cm、器高は3～4cmのもの杯A II（1～5）がある。

杯Bは、高台を持つ杯で高台の低いもの（20・21）と高く外側へふん張ったもの（19）が認められる。杯Cは内面にセラン暗文+1段放射暗文を付けたもので口縁部外側にヘラミガキを施すもの（6～8・10）とナデ調整だけのもの（9・11～13）がある。皿Aは、内面にラセン暗文+1段放斜暗文を付けたもので、口縁部外側にヘラミガキを行うもの（22）とナデ調整だけのもの（23・24）がある。法量は、口径22～23cm、器高2.5cm前後のもの皿A I（23・24）と口径10～12cm、器高2～3cm前後のもの皿A II（22）の2種類が認められる。蓋（26）は、口径21.5cmで口縁部外側にヘラミガキを施す。これは、杯Bの蓋となる。高杯B（26）は、杯部の口径が8cm、復元器高2cmで、内面に1段放斜暗文を施す。甕A（27）は、口径15cm、復元高15cm前後と考えられる小型甕である。口縁部は、く字状に外反し体部最大径がほぼ中央に位置する。外面は、タテハケを行い、内面はヨコハケの後にナデ消す。羽釜（28）の胎土は、雲母・角閃石・石英長石を含む、いわゆる生駒西麓産の上器である。口径は、24cmであり、体部・底部は欠損しており不明。

鉢は、く字状に外反する口縁部を持つもの（29）と直口しやや内弯する口縁部を持つもの（30）の2種類があり1対の把手がある。

須恵器 器形は、杯A（40）、杯B（41～47）、皿A（49）、高杯（50）、甕（48）、杯Bの蓋（31～39）がある。

杯Aは、高台を持たない杯で、口径8cm、器高3.1cmを測る。杯Bは、高台を持つもので、法量によって2種類に分類される。杯B I（44～46）は、口径17～19.5cm、器高4.4～5cmである。杯B II（41～43）は、口径14～15.5cm、器高4～4.9cmである。皿Aは、高台を持たないもので口径18cm、復元高3cmである。高杯（50）は、杯部のみで口径15.2cmを測る。甕は、口径58cmを測る中型甕で、外面に刺突文を施す。時期は7世紀前半のもので、混入物と思われる。杯B



第15図 1号墳の土器

の蓋は、内面にかえりを持つものと（31・32）と持たないもの（33～39）の2タイプがある。口径は、19cm前後のもの蓋（38・39）、16cm前後のもの蓋（34～37）、14cm前後のもの蓋（33）が認められる。

谷状遺構（第18図）

器種は、土師器（51・63～66）と須恵器（52～62）がある。コンテナで2箱あり、代表的なものを図示した。

土師器 器種は、杯C（63）、甕B（66）、甕C（51）、高杯A（64・65）がある。図示したもの以外になお多数の杯・皿の破片が出土している。杯Cは、内面に1段方斜文を付けたもので口縁部外表面をナデ調整する。甕Bは、内面にヘラケズリを行ったもので、いわゆる河内型の甕である。外面は、タテハケを施した後、底部をヨコハケで調整する。甕Cは、口径29cmの大型品である。口縁部はく字状に外反し左上りのタテハケによって調整する。体部内面はかるいヨコヘラケズリを行う。高杯Aは、棒状の脚部の付くもので、脚部内面に指おさえ痕が残る。

須恵器 器種は、杯H（52～54）、杯G（55～58）、杯Gの蓋（59～62）がある。杯Hは、古墳時代に一般的なたちあがりを持つタイプの杯で、口径7～10cm、器高3.4～3.8cmの小型品が多く底部にヘラ切り痕を残す。杯Gは、口径10～12cm、器高3.4～3.8cmの小型品が多く、形態的にも杯Aに類似したもの（55・56・58）と杯Hの蓋に類似するもの（57）がある。杯Gの蓋は内面にかえりを持つもので、口径10.2～11cmを測る。

包含層と整地層

包含層出土のものは、谷状遺構を覆う黄褐色土層（67～73・75～77）からで、整地層出土のものは、土器番号74・78・79である。

土師器 器種は、杯C（72）、杯D、杯E（76）がある。杯Dは、口径10.5cm、器高は3cmのもので、内外面共にナデ調整である。杯Eは、口径20.5cm、復元高7cmで外面にヨコヘラミガキを行う。

須恵器 器種は、杯Hの蓋（67）、杯Gの蓋（69・70）、杯B（75）、杯Bの蓋（74）、蓋C（68）、甕（77）、短頸甕（78・79）がある。杯Hの蓋は、口径10.5cm、復元高3cmを測る。

二輪（73） 甕形土器の底部と考えられ、外面に黄色と薄緑色の施釉が施される。内面はナデ調整でロクロ成形の際の凸凹が認められる。出土数は2片で同一個体のものと考えられる。

これらの土器群中、土塙4、谷状遺構出土のものは、きわめて短時期に一括投棄されたと考えられるものである。土塙4は、土師器杯A・杯Cが多量に出土しており、他に蓋・鉢・羽釜（生駒西麓産）・甕が認められる。また、須恵器は、杯Bの蓋内面にかえりを持つもの、持たないものがある。時期は、「飛鳥・藤原京発掘調査報告一Ⅱ」の編年^(注5)に対比すると、飛鳥IV～V期に相対し、実年代で云うと7世紀末葉～8世紀初頭と考えられる。谷状遺構の明黄灰色砂質土は、

素弁八葉蓮華文（軒丸瓦Ⅰ型式）に伴って、須恵器杯Hと杯Gの蓋が出土している。杯Hも口径が7~10cm前後的小型品であることや、杯Gの蓋に偏平な宝珠つまみを有することから、同編年の飛鳥Ⅱ期に相当すると考えられ、7世紀中葉の実年代が考えられる。

また、包含層出土のものは、7世紀中葉のもの（67・69・70・77）、後葉のもの（71~73）、8世紀前半のもの（68・74~76・78・79）がある。

d. 鎌倉時代末期～室町時代の土器

遺構より土器が出土したのは、土塀1（92）、土塀2（96・97）、溝1（93~95）、溝2（80~91）焼土層内（99）である。他は、灰褐色砂質土（103~104・106~107・109・114~117）と暗灰色土（100~102・105~108・110~111・111~113）の包含層内より出土している。土器は、遺構よりまとまって出土していないため、器種ごとに順を追って記述する。

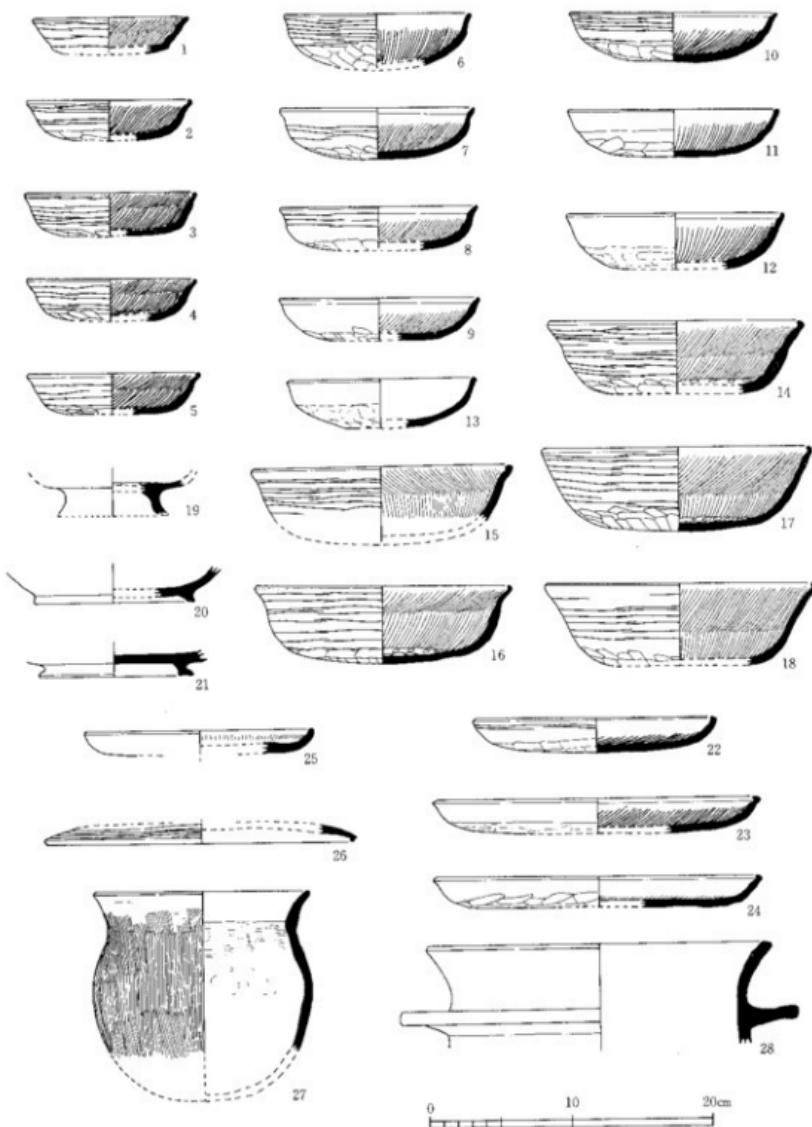
土師器 器種は、皿（80~90・93・96）、羽釜（102・103）がある。皿は、底部にナデを行なった後、口縁部をヨコナデするもの（80~90）と底部に指おさえを行った後、口縁部をやや屈曲させナデるもの（93・96）の2種類が認められる。羽釜は、口縁端部を内面に屈曲させるもの（102）、端部をさらに折り返すもの（103）がある。

須恵器 器種は、鉢（95）、甕（101）の2種類に限られる。鉢は形態・手法の特徴が、兵庫県明石市魚住古窯址群出土品に類似する。時期は、真野修編年^{〔註6〕}のⅣ期に相当する。

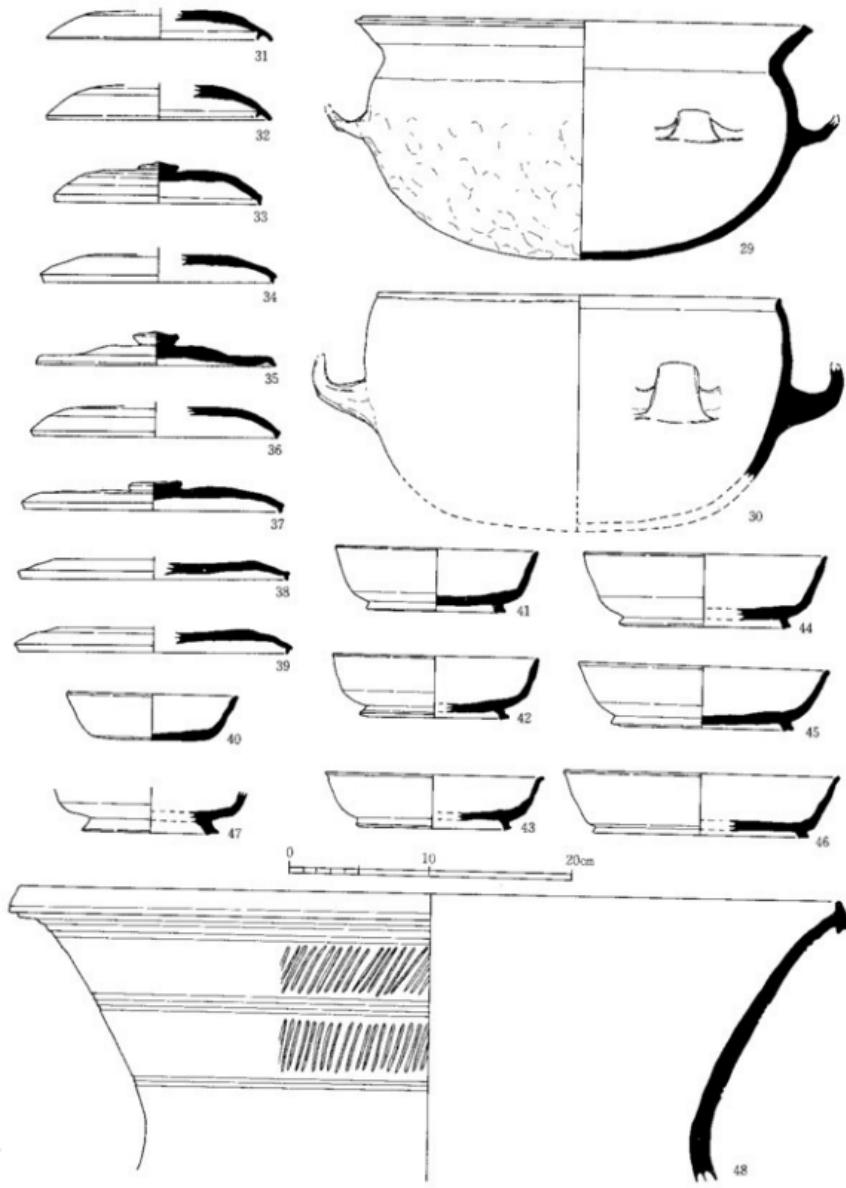
瓦器 器種は、鉢（94・98・104~106）、羽釜（91・97）、火鉢（107~111）がある。鉢は、外面をヘラケズリで成形し、内面をヨコナデ後に櫛状原体でオロシ目を施す。羽釜は、口縁部に3条の凹線をめぐらす。手法は、体部外面に回転ヨコヘラケズリを行い、内面をナデやヨコハケで調整する。火鉢は、形態によって、四角のもの（107・108）と丸いもの（109~111）に分類される。共に脚部は、3~4個の獸足を模写したもので底部に付随すると思われる。

陶器・磁器 陶器は、備前焼の壺鉢（114・115）・壺（116）、常滑焼の甕（117）がある。備前焼の壺・壺鉢は、問壁編年^{〔註7〕}のⅣ期に相当するものと考えられ、実年代で云うと14世紀頃である。常滑焼の甕は、知多古窯址群編年^{〔註8〕}のⅥ期に相当すると思われる。磁器は、皿（112）と壺（113）がある。共に詳細は観察表に示した。

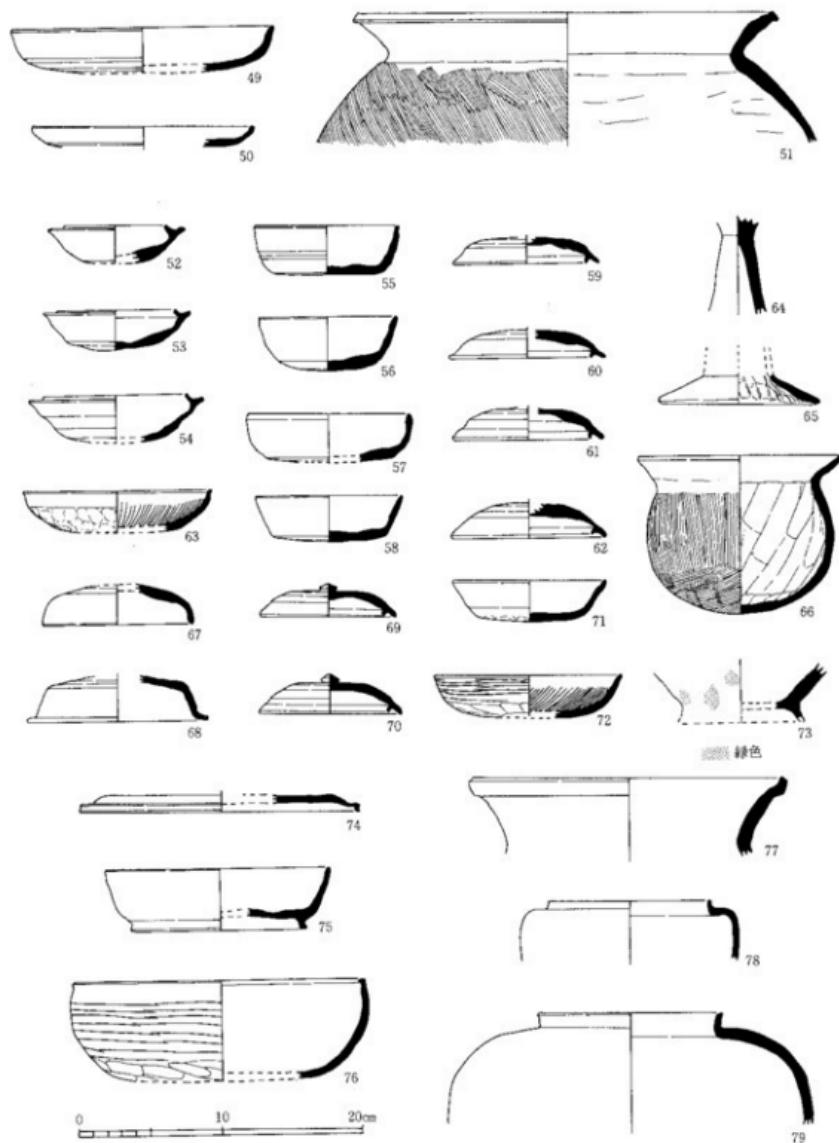
遺構出土遺物の年代は、溝2を除くと土器が多量に出土していないため、詳細にわたって時期を限定できないが、土塀1、土塀2、溝1も溝2と同様に14世紀頃と考えられる。包含層の土器も、備前焼、常滑焼、東播磨地方の土器があり、ほぼ同時期の年代が考えられよう。



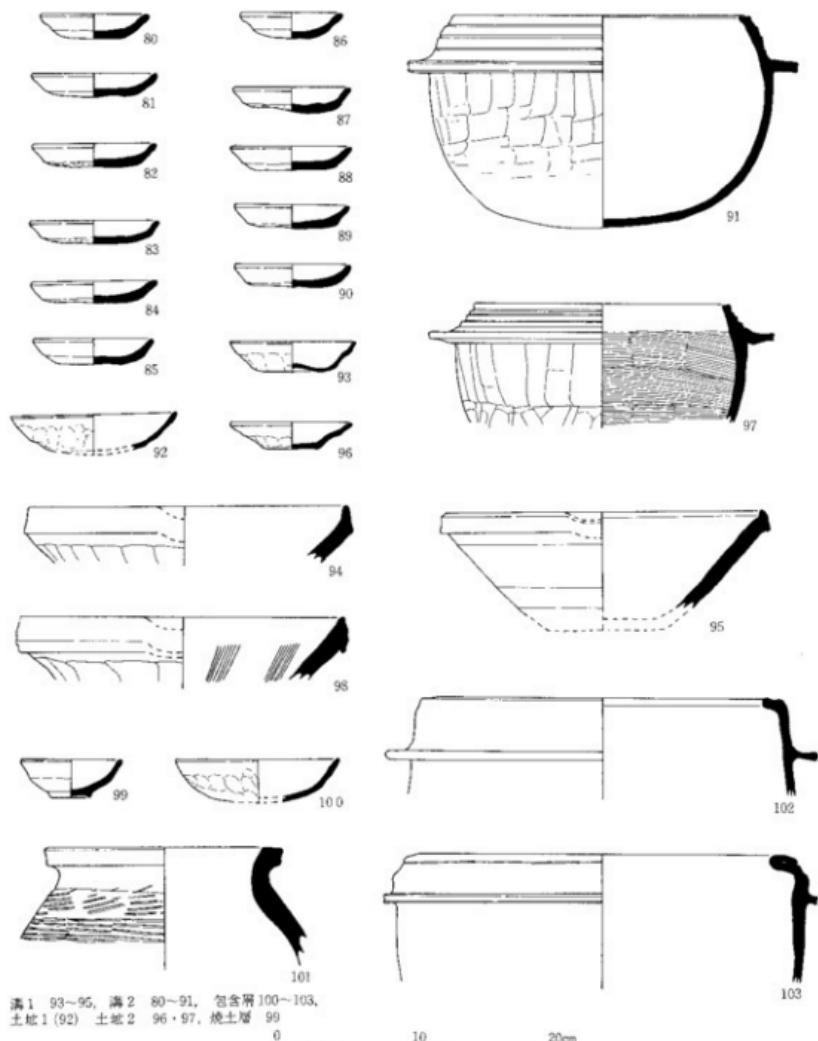
第16図 土器実測図



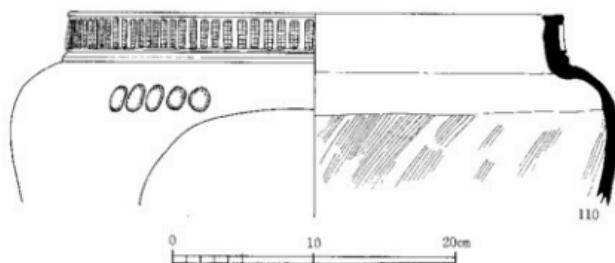
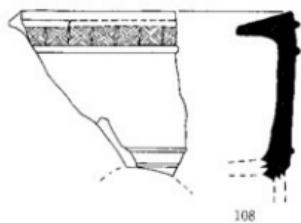
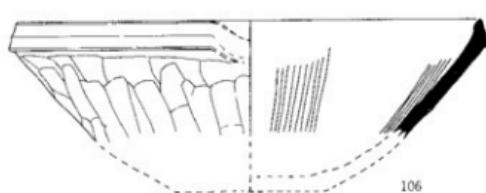
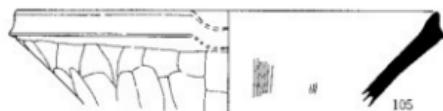
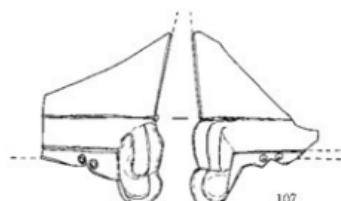
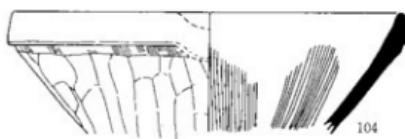
第17図 土器実測図



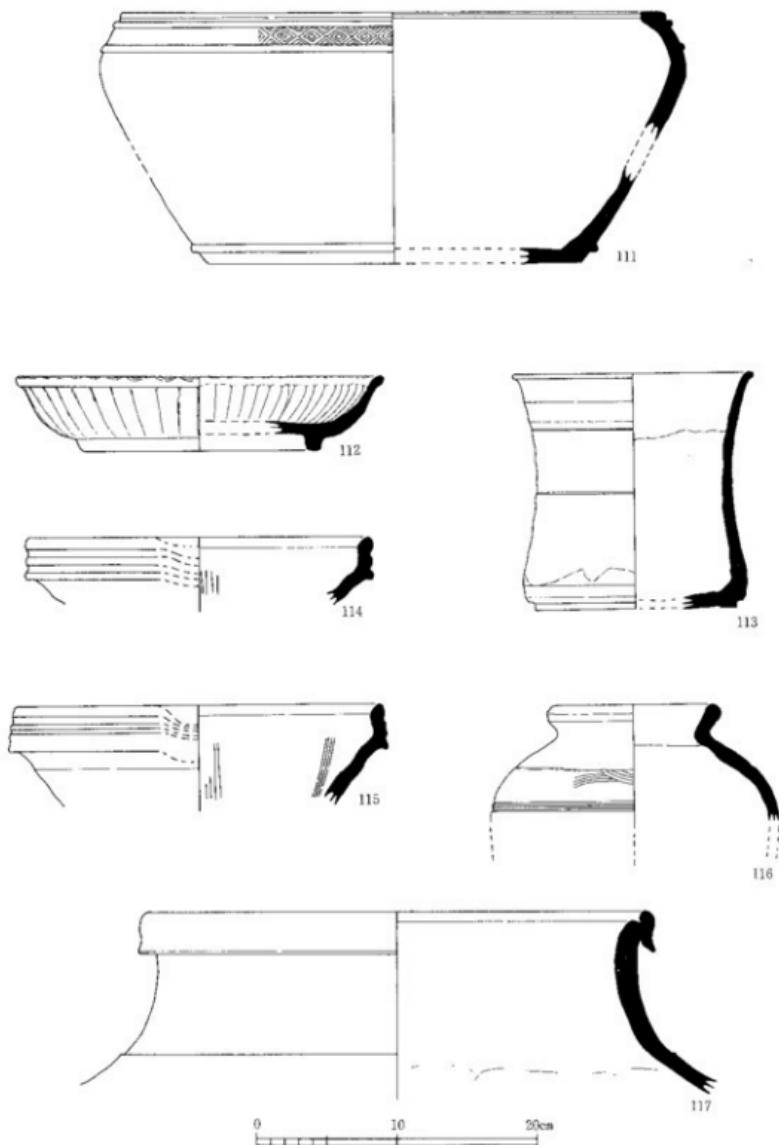
第18図 土器実測図



第19図 土器実測図



第20図 土器実測図



第21図 土器実測図

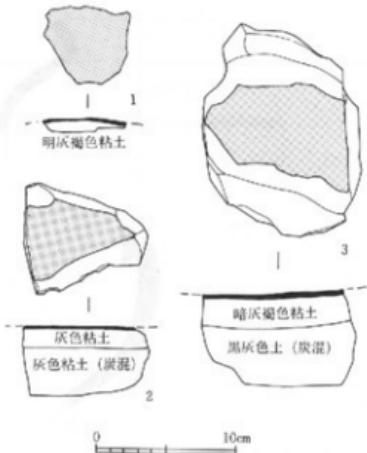
(3) 小鍛冶関連遺物

種類は、炉壁の部材3点(1~3)、フイゴ羽口2点(4・5)、銅滓・鉄滓(図版27)がある。全て小鍛冶に伴うと考えられる。スラッグは、鉄滓60g・銅滓20gほど出土した。

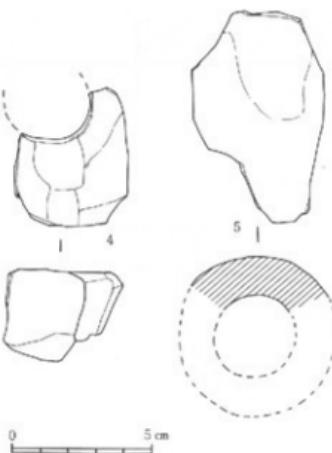
炉壁 1は、 5.5×6 cm大の炉床又は側壁の一部と思われる。厚さは3mmの鉄分凝固層があり、明灰褐色粘土層が付着する。2は、 9×8 cm大の炉床の一部である。厚さは3mmの鉄分凝固層があり、下層に灰色粘土があり、さらに下層に黒色の灰とスサを粘土で固めたものが認められる。3は、 13×15 cm大の炉床の一部である。厚さ3mmの鉄分凝固層があり下層に暗灰褐色粘土層を貼り、さらに下層に黒灰色の炭混り粘土層が残存する。出土地点は、1~3ともにF5区整地層下部の地山直上より8点が出土した。

フイゴ羽口 4は、炉床の側壁に挿入されたフイゴの羽口の先端部である。高熱の為に先端は、融解して融着している。胎土は2mm以内の砂粒を含む。色調は明灰褐色。5は、フイゴ羽口の筒部で復元直径5.5cm、内径3cm前後と考えられる破片である。色調は、高温部分が灰色、低温部分が黄褐色を呈している。胎土は2mm以内の長石・石英・雲母を含んでいる。出土地点は、4が土塙4内、5がF4区灰褐色砂質土内である。

これらの遺物の時期は、土塙4内出土のフイゴ羽口(4)が共伴土器により、7世紀後葉~8世紀初頭と考えられる。また、整地層下より8世紀前半の土器が出土しており、その炉址の廃絶時期は7世紀末頃と推定される。明らかに銅滓・鉄滓が融解し瘤状を呈しているため、铸造、鍛造の段階のものと考えられる。



第22図 炉壁実測図



第23図 フイゴ羽口実測図

(4) 金屬製品・土製品・石製品

金属製品 鉄釘（1～9）・刀子（10～12）・留金具（13）などの鉄製品と用途不明の銅製品（14）がある。鉄釘は全て鍛冶製であり、頭の成形は一端を薄く叩き伸ばして一方に折り曲げて作られている。1～4は、古墳出土のもので、1は残存長10cmで厚さ0.5cmで断面矩形を呈す。2・3は、外面に木棺の木質が縦方向に付着する。釘は、断面0.5×0.5cmで細いもの（5・6・8）と断面が0.7～1.2cmの太いもの（7・9）がある。木質の付着は7が釘に対して横方向に付く。出土地点は、5・7・8・9が灰褐色砂質土で、6が溝1内である。

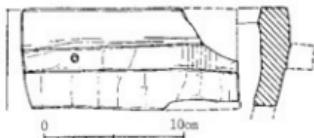
刀子は3点ありE7区暗灰色土より出土している。10・11は、刀部を残すのみであるが、13は切先を欠損しているがほぼ完成品で、現在長9cmで闇部は不明瞭である。全て鍛造製である。

留金具（10）は、中央部に直径0.6cmの円形の穴があり、厚さ0.2cmを測る。出土地点は整地層下で発見された。

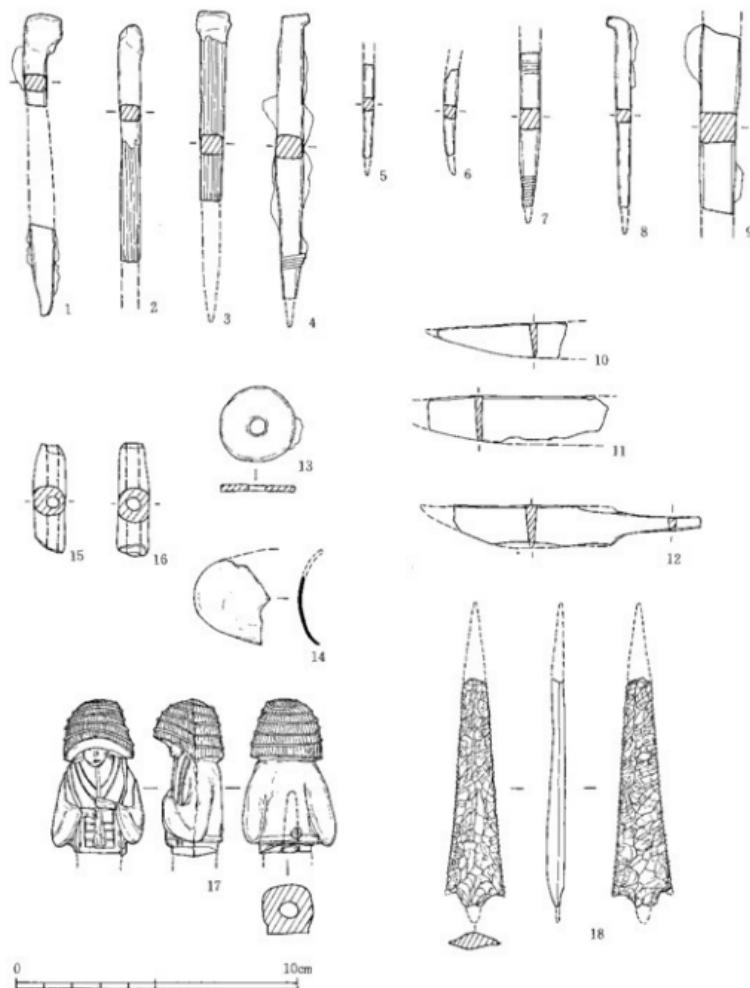
土製品 土錘（15・16）と人形（17）がある。2個の土錘は共に一方の端部を欠損している形態である。断面は直径1cmで、穴の径が0.3～0.4cmである。胎土は、0.2mm以内の少量の砂粒を含む。色調は黄灰色を呈する。出土地点は、共に灰褐色砂質土である。人形は、残存高5.5cmの虚無僧で、前と後から押圧した型づくりで作られる。体内には、直径0.5cmの穴があり、成形の際の棒痕跡と考えられる。胎土は、少量の雲母・石英・長石を含む。色調は、淡茶灰色。出土地点はE4区の暗灰色土である。

石製品 有舌尖頭器（14）、石鍋（第24図）の破片が出土。いわゆる有舌尖頭器で表面が、淡青灰色を呈している。先端部が欠損しているが、現存長8cm、最大幅2.3cm、で舌の部分で現存長0.5cm。長さに比して細身である。全身を復元すると約11.5cmのものと考えられる。両面共に右上より左下へ斜線状の横圧剝離がほどこされ、舌部を除き両側に小さな鋸歯状の剝離痕が整然と施されている。石材はサスカイト製。出土地点は、E4区の地山直上の暗灰色土層である。他にサスカイトの剝片が3点認められる。時期は、繩文時代草創期頃と考えられる。

石鍋は、滑石製で復元口径19cmを測る。鍋は転用されており四方が切断され、鍋の部分に直径5mmの穴を開ける。鍋も削り取り扁平な弯曲した板としている。何に転用されたかは不明である。出土地点は、F6区の灰褐色砂質土層内である。



第24図 石鍋実測図



第25図 金属製品・土製品・石器の実測図

第4章 結び

1. 造構の変遷

造構は、古墳1基、掘立柱建物1棟、ピット40ヶ所、土塙4ヶ所、溝2ヶ所、整地層などが検出された。これらは、古墳時代（6世紀末）から室町時代にかけたもので、造構の性格・出土遺物より3時期に大別される。

I期 (古墳時代)

調査地中央にある尾根上に古墳が1基検出されている。尾根は、東山山麓から西へ伸び北側と南側に開析谷が西北へ開口する。古墳は、大半が削平されているが、横穴式石室が遺存する。その規模は、奥壁幅1.5m、残存長2mの無袖式石室と考えられ、床面に敷石を配す。

床面上には、鉄釘が4本散乱しており、被葬者が木棺に埋葬されていたと思われる。古墳の造墓時期は、副葬された土器から6世紀末から7世紀初頭と考えられる。古墳の標高は、約38mで東山丘陵に分布する平尾山古墳群（^(註9)平野・大県支群）中、最も低い位置に立地する。この時代の当調査地は、平尾山古墳群の「墓域」である。

II期 (飛鳥時代末～奈良時代)

埋没谷（谷状造構）や包含層より多量の瓦・土器類が検出されており、「山下寺」の寺域内と考えられる。寺院に伴う堂・塔跡は、今回の調査では検出されなかったが、東側の尾根平坦面（約1500m²）に主要伽藍が存在する可能性が濃厚である。造構は、谷状造構や土塙4を検出したに留まったが、瓦類や土器が多量に出土した。特に谷状造構からは、寺院創建時期と思われる素引八葉蓮華文の軒丸瓦（I型式）と土器類が共伴しており、飛鳥の第2四半期にその上限を求めることができる。また、土塙4からは、7世紀後葉から8世紀初頭の土器に伴って、鐵滓・フイゴ羽口が出土している。これらは、整地層下より出土した銅滓・鐵滓・炉壁・フイゴ羽口と共に寺院に伴う小鐵治関連造構の存在を示唆する。瓦類は、軒丸瓦（I～V型式）、軒平瓦（I～III型式）・平瓦A～D類・丸瓦・鶴尾があり、同時代のものである。

III期 (鎌倉時代末～室町時代)

谷状造構が埋没しており、その上面に掘立柱建物、ピット群、溝、土塙がある。造構は、調査区中央の溝2を挟んで北側に建物1・ピット群等の家屋があり、南側に溝1・土塙1・土塙2が配置される。建物1の南側には、4×2.6mの範囲に焼土層がある。出土遺物は、日常雑器の

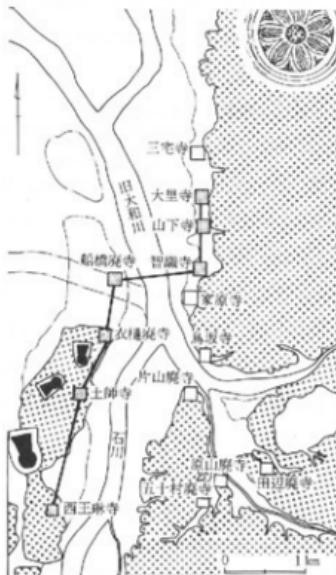
土器類が多量に出土している。その器種は、羽釜・鉢・皿・椀・甕の他に須恵器鉢（東播磨産）・常滑焼（甕）・備前焼（鉢・甕）が認められる。これらの土器組成から一般的な集落址の一部であることを示唆する。Ⅲ期の性格は、東山山麓に分布する集落址である。時期は、遺物より14世紀前後と考えられる。

上記の調査結果から、古代～中世にかけての土地利用の実態が明らかとなった。つまり、造構の変遷より3つの画期がある。第Ⅰ期は、古墳が造墓され平尾山古墳群の墓域の段階、第Ⅱ期は、墓域内に山下寺が建立され寺域として利用された7世紀中葉～11世紀段階、第Ⅲ期は、寺院がすでに廃絶しており、新たに掘立柱建物が建てられ集落が形成された14世紀段階となる。

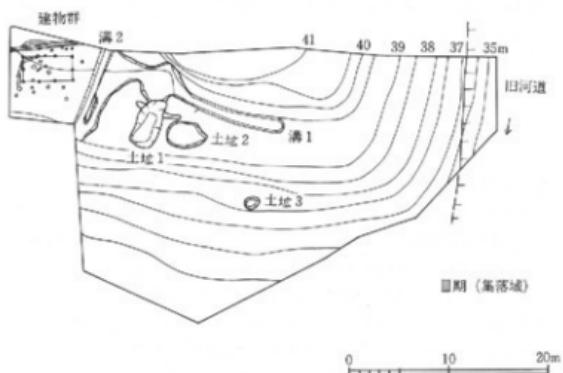
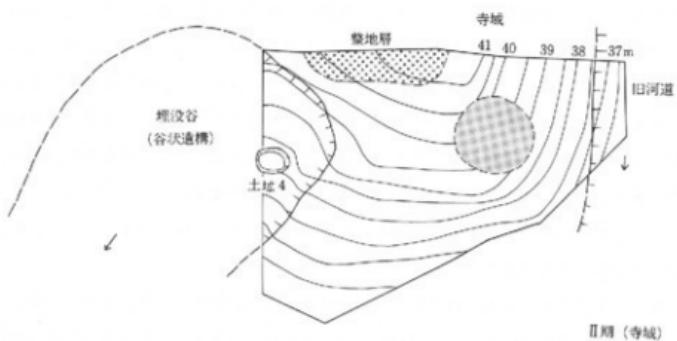
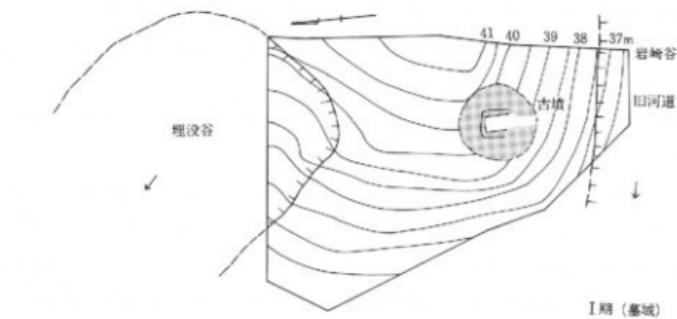
また、第Ⅱ期には、小鍛冶関連遺物の出土があり、造寺に伴うものと考えられる。このような例は、柏原市高井田・鳥坂寺^(註10)で認められる。

2. 瓦類について

軒瓦は、軒丸瓦6種、軒平瓦3種が認められる。軒丸瓦の製作年代は、第Ⅰ型式のものが谷状造構内で飛鳥第2四半期の土器と共伴しており、飛鳥時代末に比定できる。第Ⅱ型式は、山田寺系の単弁8葉蓮華文を模倣して作られたと考えられる単弁7葉蓮華文で花弁も山田寺系のものに比べて肉薄である。この種の瓦は、現在のところ柏原市大里寺跡、^(註11)智識寺跡、^(註12)船橋廃寺跡、^(註13)藤井寺^(註14)跡、^(註15)衣縫廃寺跡、^(註16)土師寺跡、^(註17)羽曳野市西琳寺跡などの寺院から同范、同種のものが出土している。胎土には、石英・長石・雲母の他に一部角閃石を含むものが認められる。製作年代は、山田寺建立(645年)をやや下った頃で、白鳳時代前期に比定される。また、第Ⅱ型式の瓦は、河内国大県郡・志紀郡・古市郡を中心とした地域の寺院に検出されており、瓦の生産と造寺の関係を知る上で最も注目される瓦であろう。第Ⅲ型式は、鳥坂寺出土の軒丸瓦Ⅲ型式に類似している。胎土は、第Ⅱ型式の瓦と同じく雲母粒を多量に含む。第Ⅴ型式は、忍冬文を持つもので大和国西安寺などで数例、同種のものが認められる。瓦当面の忍冬文が凸状になるものは、柏原市大里寺、藤井寺市野中寺、富



第26図 軒丸瓦第Ⅱ型式の分布



第27図 遺構変遷図

田林市龍泉寺出土のものに認められるが、忍冬文が凹状になるものは河内で唯一の例である。

このように第Ⅰ型式が飛鳥時代末、第Ⅱ～Ⅴ型式が白鳳時代に比定できる。第Ⅵ型式は、巴文の瓦で平安時代末～鎌倉時代と思われる。

軒平瓦は、素文（第Ⅰ型式）のものの他に、3重弧文・4重弧文があり、白鳳時代に製作された瓦である。

これらの瓦類は、胎土・焼成・色調によって、数群に分類されるがその内3群が、軒瓦、平瓦、丸瓦とセットになって把握できる。Ⅰ群は、谷状造構出土の軒丸瓦（K1～3・K5）と平瓦（K37・K39・K40）と丸瓦からなるもので、厚さ1.5cmの薄手のものが多く、焼成も硬質である。胎土は石英・長石を含む。色調は青灰色を呈するものが多いが、赤褐色系のものも認められる。平瓦の叩き目は、平行叩き（A類）、細目の斜格子目叩き（B類）が一般的な手法である。^{註18)}類似したものに船橋廃寺出土品がある。Ⅱ群は、軒丸瓦第Ⅱ・Ⅲ型式や平瓦（K44～K49）、丸瓦（K57）からなる1群である。特徴は、胎土中に多量の雲母、長石、石英を含み、一部角閃石を含むものが認められる。色調は、高温焼成であれば青灰色、酸化炎焼成であれば、明茶褐色を呈する。比較的器壁の厚い瓦が多く、作りも粗雑なものが多い。平瓦は、棱杉叩き目（C類）がほとんどで、桶巻き作りである。Ⅲ群は、軒丸瓦第Ⅴ型式と平瓦D類、丸瓦（K58）、鶴尾（K59）からなる1群。特徴は色調が灰白色～灰褐色を呈し、胎土中に長石、石英等の砂粒を含む。比較的に器壁の厚い瓦が多く、外面に楕円叩きの文様を施す。平瓦は、凸面に再調整叩き（D類）を有するもので1枚造りと考えられる。

この3群は、Ⅰ群が共伴土器より7世紀前半、Ⅱ群が7世紀中葉～後葉、Ⅲ群が7世紀後半を中心とした時期に製作されたものと思われ、山下寺に最初に使用されたⅠ群→Ⅱ群→Ⅲ群と云う相対的な年代差を示すと考えられる。また、柏原市内の生駒西南麓の寺院には、Ⅲ群のような雲母粒を多量に含む瓦類があり、一部角閃石を含むものが認められることから当地域内で生産された可能性が濃厚である。

註

註1 柏原市平野2丁目にあたり、下水道建設に伴う昭和58年2月の調査。

註2 柏原市大原4丁目にあたり、下水道建設に伴う昭和58年12月の調査。

註3 柏原市高井田の鳥坂寺城内の古墳の石室内に供獻、昭和58年6月の調査。

註4 柏原市教育委員会「片山魔寺塔跡発掘調査概報」1983年3月

註5 奈良文化財研究所「飛鳥・難波京発掘調査報告一Ⅱ」1978年

註6 真野 修「魚住古窯址群考一1」歴史と神戸（第18巻・1号）1979年

註7 間塙忠彦「備前焼ノート（2）」食教考古館集報2 1966年

註8 横崎彰・「東海」古代・中世における手工業の発達 日本の考古学Ⅶ（上）1993年

註9 大阪府教育委員会「平尾山内墳群分布調査概要」1974年

- 註10 柏原市教育委員会「鳥坂寺跡 僧房現地説明会資料」1983年7月
- 註11 奈良国立博物館「飛鳥・白鳳の古瓦」1975年
- 註12 前掲註11
- 註13 藤沢一夫「柏原市史」第4巻1980年
- 註14 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」1959年
- 註15 前掲註11
- 註16 前掲註11
- 註17 前掲註11 奈良県斑鳩町に所在する寺院である。
- 註18 原口正三他「船橋一Ⅱ」平安高校 1953年

土 器 觀 察 表

古墳時代～奈良時代

土城 4

| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の形態 | 備考 |
|------|-----|-------|---|---|---|
| ①～⑤ | 土師器 | 杯A II | ○口径18～19cm前後、器高5～6cm。 ○広く平らな底部と斜め上にひらく口縁部とからなる。口縁部は下半が内窓、上半はわざかに外寄する弧をえがき、口縁端部が内側にまるく肥厚する。 | ○内面に2段放射暗文＋ラセン暗文。 ○口縁部は外面ヨコヘラミガキ。 ○底部はヘラケズリ。 | ○胎土、ほとんど砂粒含まず。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑥～⑬ | 土師器 | 杯C | ○広く丸い底部と斜め上にひらく口縁部とからなる。口縁部は内傾に内窓し、端部を面とするもの(7～10・12)と丸くなるもの(11・13)がある。 | ○内面に1段放射暗文＋ラセン文を施すもの(7)、1段放射文のものの(8～13)がある。 ○底部はヘラケズリのもの(7～9・10～12)とナデのもの(13)がある。 ○体部外面にヨコヘラミガキを持つもの(7・8・10)とナデ調整のもの(9・11～13)がある。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まず。 ○色調、明赤褐色～赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑭～⑯ | 土師器 | 杯A I | ○口径10～12cm、器高3～4cm。 ○広く平らな底部と斜め上にひらく口縁部とからなる。口縁部は下半が内窓、上半はわざかに外寄する弧をえがき、口縁端部が内側にまるく肥厚する。 | ○内面は、ラセン暗文＋正放射暗文＋斜放射暗文となる。 ○底部外面は細かいヘラケズリの後にヨコヘラミガキを施す。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まず。 ○色調、明赤褐色～赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑰～⑲ | 土師器 | 杯B | ○平底と斜め上に開く口縁部からなり、高台をそなえる。 ○高台は低いもの(20・21)と高いもの(19)がある。 | ○⑮・⑯は内面にラセン暗文を施す。 ○⑯は底部外面はヨコヘラミガキを施す。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まず。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、やや良好。 |
| ⑳～㉑ | 土師器 | 皿A | ○広く丸い底部と斜め上にひらく口縁部とからなる。口縁部は、端部が内側にまるく肥厚する。 ○口径によって、口径22～23cm、器高2.5cmのもの皿A Iと口径10～12cm、器高2～3cmの皿A IIの2種類がある。 | ○内面にラセン暗文＋1段放射文を施す。 ○口縁部外面にヨコヘラミガキを施すもの(22)とナデ(23・24)がある。 | ○胎土、少量のクサリ跡を含む。 ○色調、明赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉒ | 土師器 | 高杯B | ○偏平な杯部にやや外反した短い口縁部が付く。 | ○内面は正放射文。 | ○胎土、0.2cm以内の石英粒を含む。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉓ | 土師器 | 蓋 | ○口径21.5cm、杯Bの蓋である。 ○偏平な蓋で、端部がやや内傾する。 | ○外面上にヨコヘラミガキを施す。 ○内面はヨコナデ。 | ○胎土、0.2cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉔ | 土師器 | 甕A | ○口縁部はく字状に外反し、体部最大径が体部中央に位置する。 | ○外面上はタテハケ、内面はヨコハケの後にナデ消す。 | ○外面上に2次焼成痕。 ○胎土、0.2cm以内の長石、石英多し。 ○色調、明赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉕ | 土師器 | 羽釜 | ○口縁部は、やや外反し、端部が肥厚する。 ○側は水平にひき出し、端部が直となる。 | ○内外面はヨコナデ。 ○器壁は0.8mmで比較的薄い。 | ○胎土、0.2cm以内の石英、長石、角閃石を含む。 ○焼成、良好。 ○色調、赤褐色。 ○生駒西遺産。 |

| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|------|-----|----|---|--|---|
| ⑨ | 土師器 | 鉢A | ○く字状に外反する口縁部を持ち、体部は扁平な底部につづく。口縁部は内面にかるく面をなし肥厚する。把手は1対あり、三角形を呈する。 | ○底部は指オサエ、外面はヨコナデ、内面はナデ調整。 ○把手は押入法。 | ○胎土、0.3cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、明赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑩ | 土師器 | 鉢B | ○ほぼ直立する口縁部、体部から丸い底部につづく。口縁部は腹部が外反する。 ○把手は1対あり、三角形を呈する。 | ○内外面は共にヨコヘラミガキ。 ○把手は押入法。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まない。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑪～⑫ | 須恵器 | 蓋 | ○突起つまみは偏平なものが多い。 ○内面にかえりを有するもの(31・32)と持たないもの(33～39)がある。 | ○体部上半はヘラケズリを行い、ロクロは時計回り。 | ○胎土、0.1～0.5cm内外の石英、長石を含む。 ○色調、明灰褐色～灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑬ | 須恵器 | 杯A | ○口縁部は、斜上方に向ひらき、丸くおきめた腹部となる。 | ○底部はヘラ切りの後にナデ調整。 ○口縁部・体部内外面はナデ。 ○ロクロは時計回り。 | ○0.3cm以内の大粒の長石、石英を含む。 ○色調、灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑭～⑮ | 須恵器 | 杯B | ○法量によって、口径17～19.5cm、器高4.4～5cmのもの杯B I (44～46)と口径14～15.5cm、器高4～4.4cm杯B II (41～43)がある。 ○口縁部は斜上方に向ひらき、外反するもの(41・42・44～47)と先端が外反するもの(43)が認められる。 | ○底部はヘラケズリ、ロクロは時計回り。 ○口縁部・体部はヨコナデ。 | ○胎土、0.3cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、灰褐色～明灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑯ | 須恵器 | 甕 | ○大きく外反した口縁部に断面二角形を呈した瘤部が付く。 ○U字縫部外面は、3本を基位とした凹線を3ヶ所に施し、刺突文を行う。 | ○内外面はヨコナデ。 ○ロクロは時計回り。 | ○胎土、0.4cm以内の長石、石英を含む。 ○色調、暗灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑰ | 須恵器 | 皿A | ○口径18.4cm、器高3cmでやや外反した口縁部が付く。 ○口縁部は内面が肥厚する。体部と底部は丸くなって縁き明瞭な境はない。 | ○底部外面は回転ヘラケズリ、ロクロは時計回り。 | ○胎土、0.2cm以内の石英、長石を含む。 ○焼成、良好。 ○色調、明灰褐色。 |
| ⑱ | 須恵器 | 高杯 | ○杯部は口径15.4cm、器高2cmできわめて浅い。 | ○内外面はナデ。 ○底部はヘラケズリ。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まない。 ○色調、明灰褐色。 ○色調、良好。 |

谷状造構

| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|------|-----|----|--|---------------------------------------|--|
| ⑲ | 土師器 | 甕C | ○口縁部はく字状に外反し、丸い体部が付く。 | ○体部外縁はタチハケ、内面はヨコナデ。 | ○胎土、0.1cm以内の少量の砂粒を含む。 ○色調、棕色。 ○焼成、もろい。 |
| ⑳～㉑ | 須恵器 | 杯H | ○底部と体部の境は明瞭で受部が外方へ伸びる。 ○立ちあがりは短く、内側に内傾する。 | ○底部外面はヘラケズリのもの(52・53)とヘラ切り(54)のものがある。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まない。 ○色調、明青灰色。 ○焼成、良好。 |

| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|------|-----|------|--|---|---|
| ⑩-⑪ | 須恵器 | 杯G | ○口縁部が直線的にのびるもの(58)とやや内寄するもの(55-57)がある。 ○55は外面に凹線を施し、底部に「f」のヘラ記符がある。 | ○底部外面はヘラケズリのもの(55-56)とヘラ切り(57)がある。 ○内外面とも他はナデ。 | ○胎土、0.2-0.4cmの石英、長石を含む。 ○色調、明青灰色~青灰色。 |
| ⑫-⑬ | 須恵器 | 杯Gの蓋 | ○かえりを有する蓋で、かえりが端部より下へさがらない。 | ○天井部はヘラケズリ、ロクロは時計回り。 ○内外面はヨコナデ。 | ○胎土、0.2-0.4cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、青灰色~明青灰色 ○焼成、良好 |
| ⑭ | 土師器 | 杯C | ○口縁部はやや外反し、体部はやや偏平である。 | ○外面は指オサエ。 ○内面は1段正放射文。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まず。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑮-⑯ | 土師器 | 高杯A | ⑯は脚部、⑯は脚襷部である。 | ○外面はナデ。 ○襷部内面は指オサエ。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まず。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑰ | 土師器 | 甕B | ○口縁部はく字状に外反し、丸い体部が付く。 ○底部は丸底で全体に球形を呈す。 | ○外面はタテハケ。底部は再割整のヨコハケを行う。 ○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部内面は右上りのヘラケズリ。 | ○胎土、0.2-0.3cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、明黄褐色。 ○焼成、良好。 |

包含層と整地層

| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|------|------|------|---|---|--|
| ⑮ | 須恵器 | 杯H蓋 | ○丸く偏平な天井部で口縁端部を丸くおさめる。 | ○天井部はヘラ切り。 ○ロクロは時計回り。 | ○船上、0.2cm以内の砂粒が多い。 ○色調、青灰色。 ○焼成、良好。 |
| ⑯ | 須恵器 | 蓋C | ○体部に段を有する蓋で偏平な宝珠つまみが付く。 | ○天井部はヘラケズリ。 ○ロクロは時計回り。 | ○胎土、ほとんど砂粒含まず。 ○色調、明灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑰-⑱ | 須恵器 | 杯Gの蓋 | ○かえりを有する蓋で偏平な宝珠つまみが付く。 ○かえりは端部より下へさがらない。 | ○天井部はヘラケズリで、ロクロは時計回り。 ○内面は仕上げナデ。 | ○胎土、ほとんど砂粒含まない。 ○色調、青灰色。 ○焼成、良好。 |
| ⑲ | 土師器 | 杯D | ○丸い体部にやや外反し内傾する口縁部が付く。 | ○底部は指オサエ。 ○内外面はヨコナデ。 | ○胎土、ほとんど砂粒含まず。 ○色調、明褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑳ | 土師器 | 杯C | ○口縁部は丸くおさめ体部と底部へとつづく。 | ○内面は1段の斜放射文。 ○体部外面は横方向のヘラミガキ。 ○底部は手持ちヘラケズリ。 | ○胎土、ほとんど砂粒含まず。 ○色調、赤褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉑ | 施釉陶器 | 甕 | ○外方へふんばった高台を有する。 | ○外面は黄地に茶色の釉を塗付する。 | ○二輪の甕? ○胎土、0.1cm以内の少量の石英を含む。 ○色調、地(灰白色)、釉(黄・緑色)。 |

| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|------|-----|------|---|--|---|
| ⑪ | 須恵器 | 杯Bの蓋 | ○口縁端部を一度、外方向へ外反させ先端部を直立させる。 | ○天井部はヘラケズり他はヨコナデ。 | ○胎土、0.1cm以内の砂粒を少許含む。 ○色調、灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑫ | 須恵器 | 杯B | ○やや外反した体部と口縁部を持ち、断面台形の高台が付く。 | ○内外面共にヨコナデ。 ○ロクロは時計回り。 ○内面に凹凸多し、底部ヘラケズリ。 | ○胎土、ほとんど砂粒含まず。 ○色調、明灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑬ | 土師器 | 杯E | ○内側の口縁部と体部があり、偏平な底部となる。 | ○内面はヨコヘラミガキ、外面はヨコヘラミガキ。 ○底部はヨコヘラケズリ。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まず。 ○焼成、良好。 ○色調、明赤褐色。 |
| ⑭ | 須恵器 | 甕 | ○大きく外反した口縁部は断面三角形を呈す。 | ○内外面ともヨコナデ。 | ○胎土、0.1cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、明灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑯・⑰ | 須恵器 | 蓋 | ○高く直立する口縁部に丸い体部がつく。 ○蓋はやや最大径が体部上半に位置し肩が頗る。 | ○内外面にヨコナデ。 ○⑯は外面上に自然釉付着。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まず。 ○色調、明灰褐色。 ○焼成、きわめて良好。 |

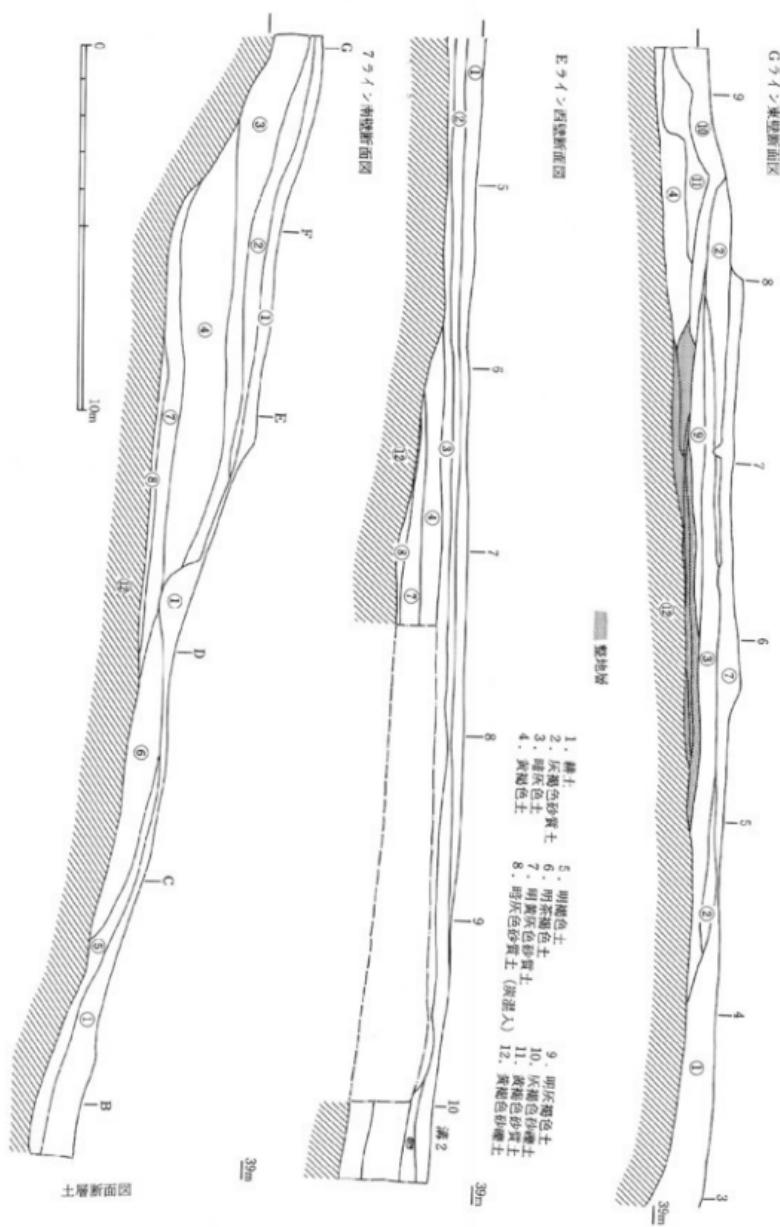
鎌倉時代末～室町時代

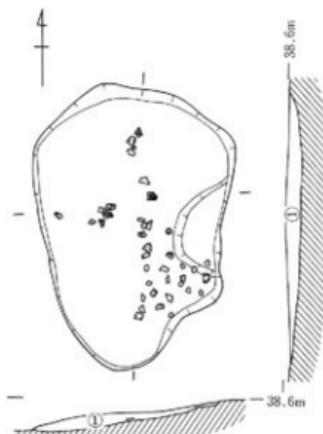
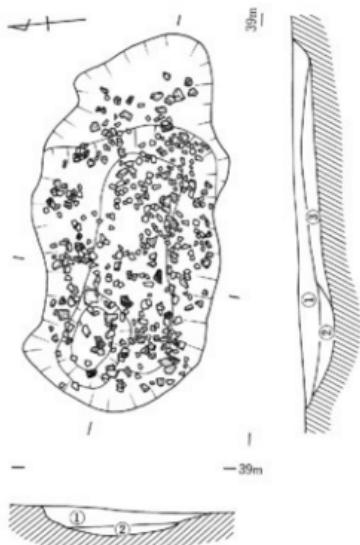
| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|-----------------|-----|----|---|--|--|
| ⑮～⑯ ・⑰ ・⑲ | 土師器 | 皿 | ○2種類あり、I口縁部がやや外反し、ヨコナデを行い底部に指オサエを持つもの(80～90)と外間に指オサエによって薄くするもの(93・96)がある。 | ○⑮～⑯は外面上ともヨコナデ。 ○⑰・⑲は外面上指オサエ、内面はヨコナデ。 | ○胎土、0.1cm以内の長石、石英を多く含む。 ○色調、明黄褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑳ | 須恵器 | 鉢 | ○口縁部はやや面を持ち、内面に少しつまみ込む。 ○口縁部は片口鉢と考えられる。 | ○内外面ともヨコナデ。 ○ロクロ逆時計回り。 ○内面底部に使用痕あり。 | ○明石市魚住産? ○胎土、0.2cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、青灰色。 ○焼成、良好。 |
| ㉑・㉒ ・㉓ | 瓦器 | 碗 | ○小型の高台の付く碗(㉑)と浅い碗(㉒・100)がある。 ○共に粗雑。 | ○㉑・㉒は、外面上指オサエ、内面ナデ。 ○㉓は、内外面ともヨコナデ。 | ○胎土、0.1cm以内の石英、長石を含む。 ○色調、灰白色～灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉔ | 須恵器 | 甕 | ○大きく外反した口縁部に平坦な面を持つ瓶型となる。 ○体部は丸くなり、きわめて唇壁が厚い。 | ○体部外面は平行叩き目。 ○体部内面はナデ。 | ○胎土、0.1cmの砂粒を含む。 ○色調、灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉕・㉖ | 土師器 | 羽釜 | ○I口縁部は直立し端部を内側に跳ね起せるもの(102)とさらに外反させるもの(130)がある。 ○また、㉖の羽釜はI口縁部より下へ4cmの所にあり突出度1.8cmを測る。羽は、甕が幅1cmでほとんど退化している。 | ○内外面ともヨコナデ。 | ○胎土、0.1cm以内の石英、長石が多い。 ○色調、明黄褐色。 ○焼成、良好。 |
| ㉗・㉘ ・㉙～㉚ | 瓦器 | 鉢 | ○口縁部は大きく上方で拡張するもの(106・94・98)と丸くするもの(104・105)がある。 | ○体部外面はタテヘラケズリ、内面はオシメが認められる。 ○口縁部は片口のもの(105)がある。 | ○胎土、0.2cm以内の石英、長石が多い。 ○色調、黒褐色。 ○焼成、良好。 |

| 土器番号 | 種類 | 器種 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|------|------------|-----------|--|---|---|
| ⑪・⑫ | 瓦器 | 羽釜 | ○口縁部に3本の凹線を施す。 ○体部は最大径が上位にあり、底部がやや扁平。 | ○内面にハケをもつもの(97)とナデ消すもの(91)がある。 | ○胎土、0.1cm以内の石英、長石が多い。 ○色調、灰白色～黒灰色。 ○焼成、良好。 |
| ⑬～⑯ | 瓦器 | 火鉢 | ○四形いもの(107・108)と丸いものの(109～111)がある。脚部は歯足のもの丸角ともある。 | ○⑪～⑭・⑯は外外面ともナデ。 ○⑯は、外面上にスタンプ文があり、内面は右上りのハケメをナデ消す。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含まない。 ○色調、暗灰色～灰褐色。 ○焼成、良好。 |
| ⑰・⑱ | 陶器 | 鉢 | ○懶前焼の鉢で口縁外面に3～4本の凹線を施す。 ○口縁部は内側に直立し、端部を丸くおさめる。 | ○内面にオロシメを施す。 ○外面上ナデ。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含ます。 ○色調、茶褐色。 ○焼成、良好。 ○懶前焼。 |
| ⑲ | 磁器 (青磁) | 皿 | ○外反した口縁部はやや外側に折曲した端部をもつ。 ○高台は台状を呈するが、凹溝は丸くなる。 ○内外面は、輪花状の花卉文様を配す。 | ○内外面には花文状に放射状の線が認められる。 ○口縁部も輪花状を呈する。 ○底部はヘラケズリを行う。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含ます。 ○色調、青緑色。 ○焼成、良好。 |
| ⑳ | 磁器 | 盃？ 花瓶？ | ○直口し体部中央で大きく外反した口縁部を持つ。 ○底部は削り出しの高台を持つ。 | ○底部と体部外反はヘラケズリ、ロクロは時計回り。 ○体部外面に2ヶ所でゆるい凹線を施す。 ○高台はケズリ出し高台。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含ます。 ○色調、地(明灰褐色)、釉(緑灰色)。 ○焼成、良好。 |
| ㉑ | 陶器 | 壺 | ○懶前焼で口縁部の短かく、丸い端部が付く。 ○体部・頸部に明顯な粘土の接合痕がある。 | ○体部外面には3本の凹線をめぐらし、上半に櫛状原体で文様をつける。 ○他は外外面ともナデ調整。 | ○胎土、ほとんど砂粒を含ます。 ○焼成、良好。 ○色調、米褐色。 |
| ㉒ | 陶器 | 甕 | ○直立する口縁部と体部の境に明瞭な段を持つ。 ○口縁部は外反した後に上下に肥厚させ端面をつくる。 | ○内外面ともナデ。 ○粗雑である。 | ○胎土、0.2cm以内の石英、長石多く、粗雑。 ○色調、明灰褐色。 ○焼成、良好。 |

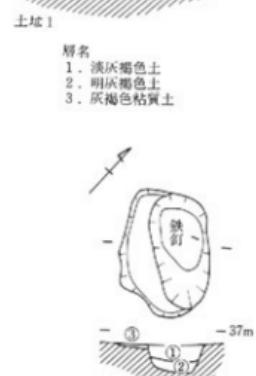
図 版

図版 1 遺構



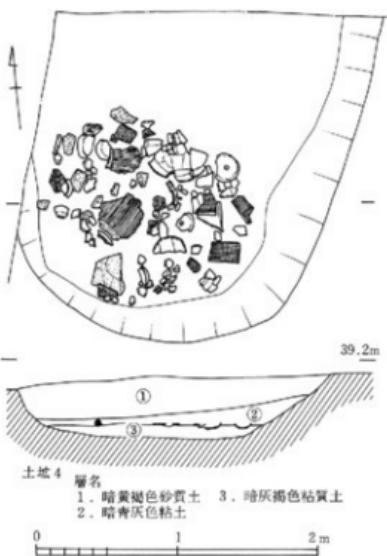


土塙2 層名 1. 明灰褐色土



土塙3 層名
1. 灰褐色砂質土
2. 明灰褐色砂質土
3. 灰褐色土

土塙1～4 遺構図

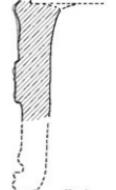
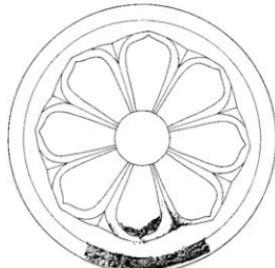
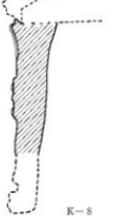
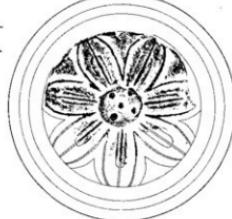
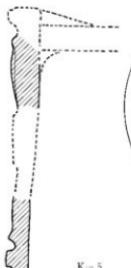
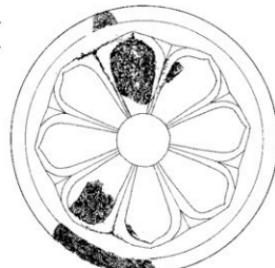
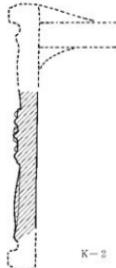
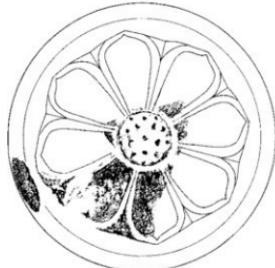
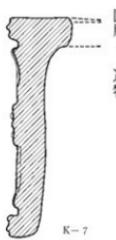
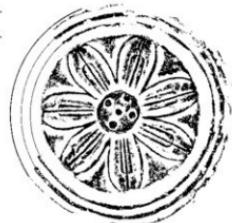
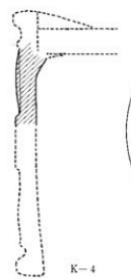
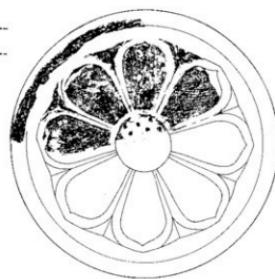
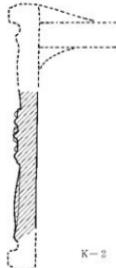
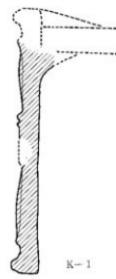
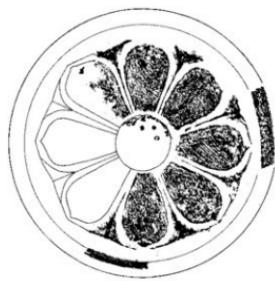


土塙4 層名
1. 暗黃褐色砂質土
2. 暗青灰色粘土
3. 暗灰褐色粘土

0 1 2 m

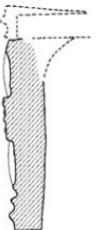
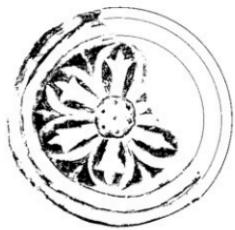
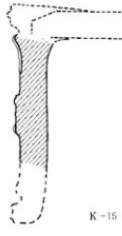
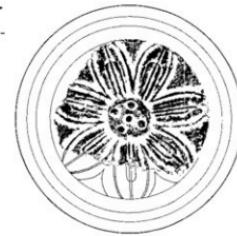
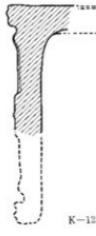
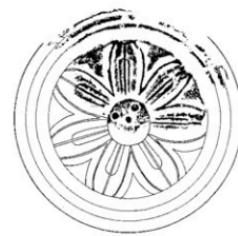
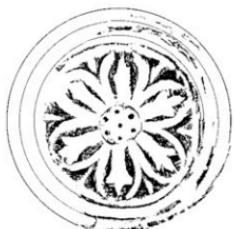
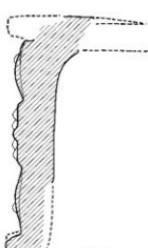
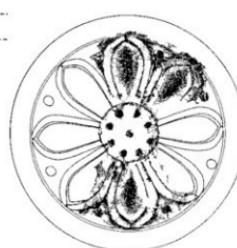
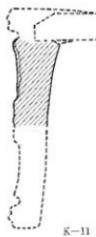
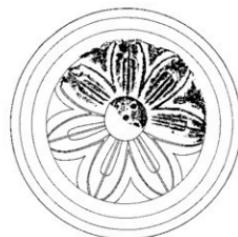
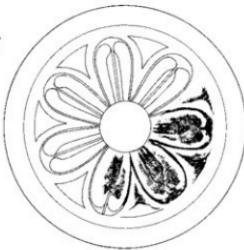
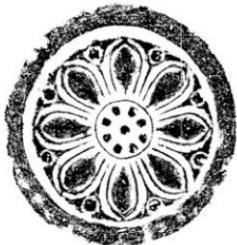
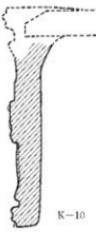


溝1・2遺構図



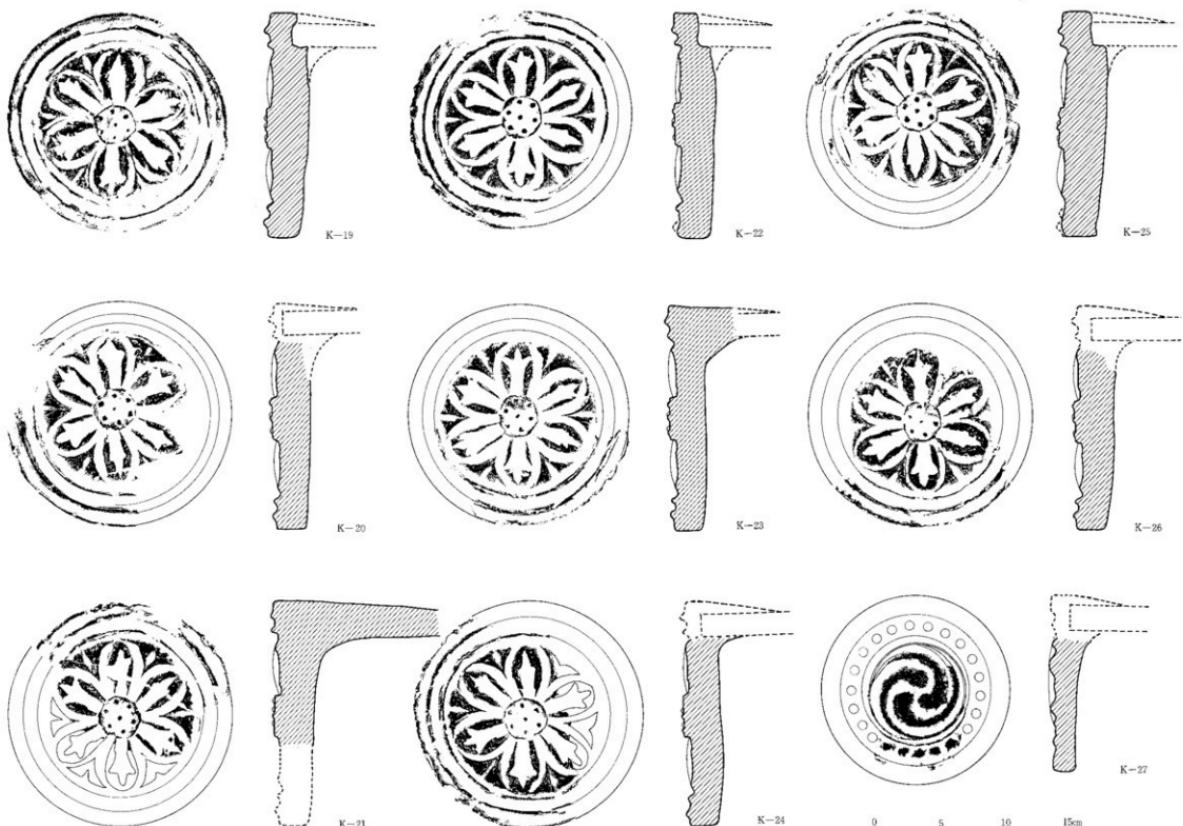
0 5 10 15cm

I型式 K-1～K5 II型式 K-6～K9 軒丸瓦実測図



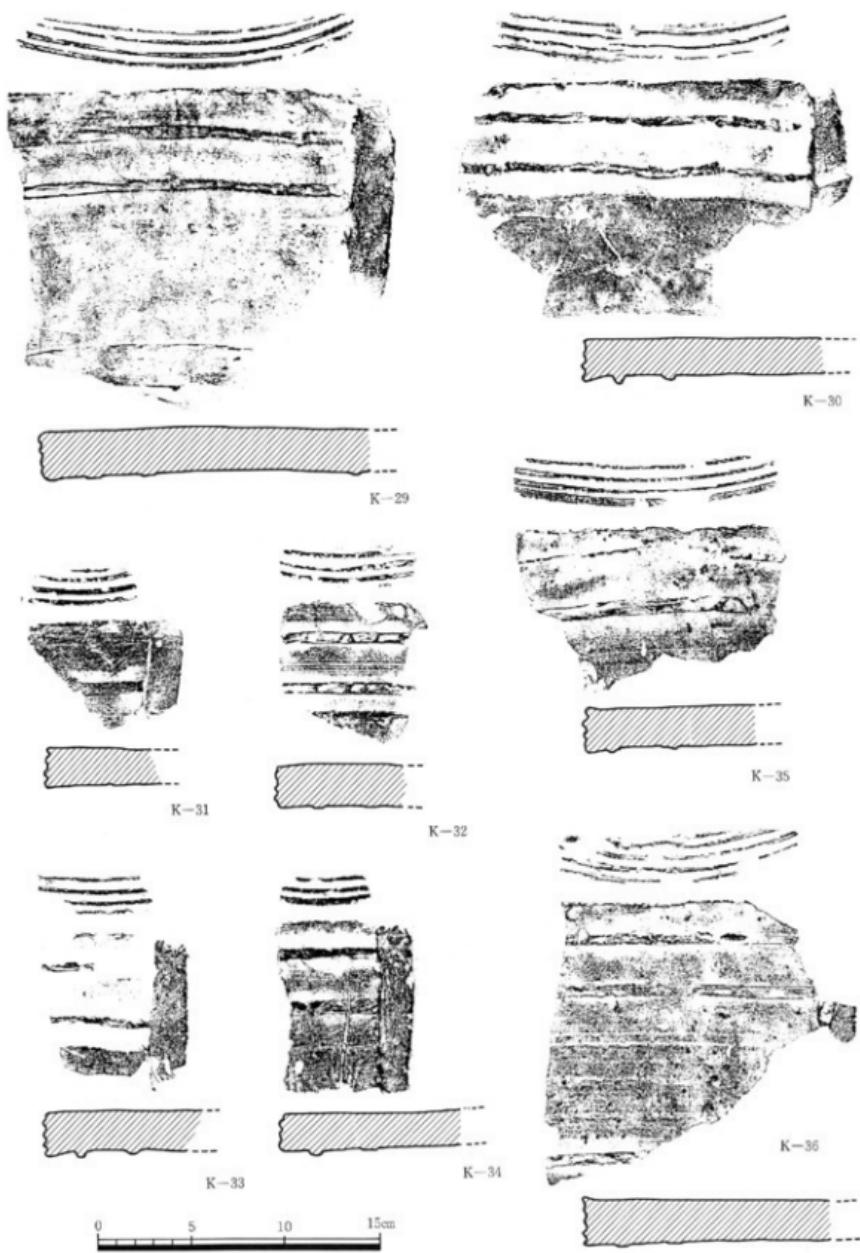
0 5 10 15cm

II型式K-10-K-12・K-15 III型式K-13・K-14 IV型式K-16 V型式K-17・K-18
軒丸瓦実測図

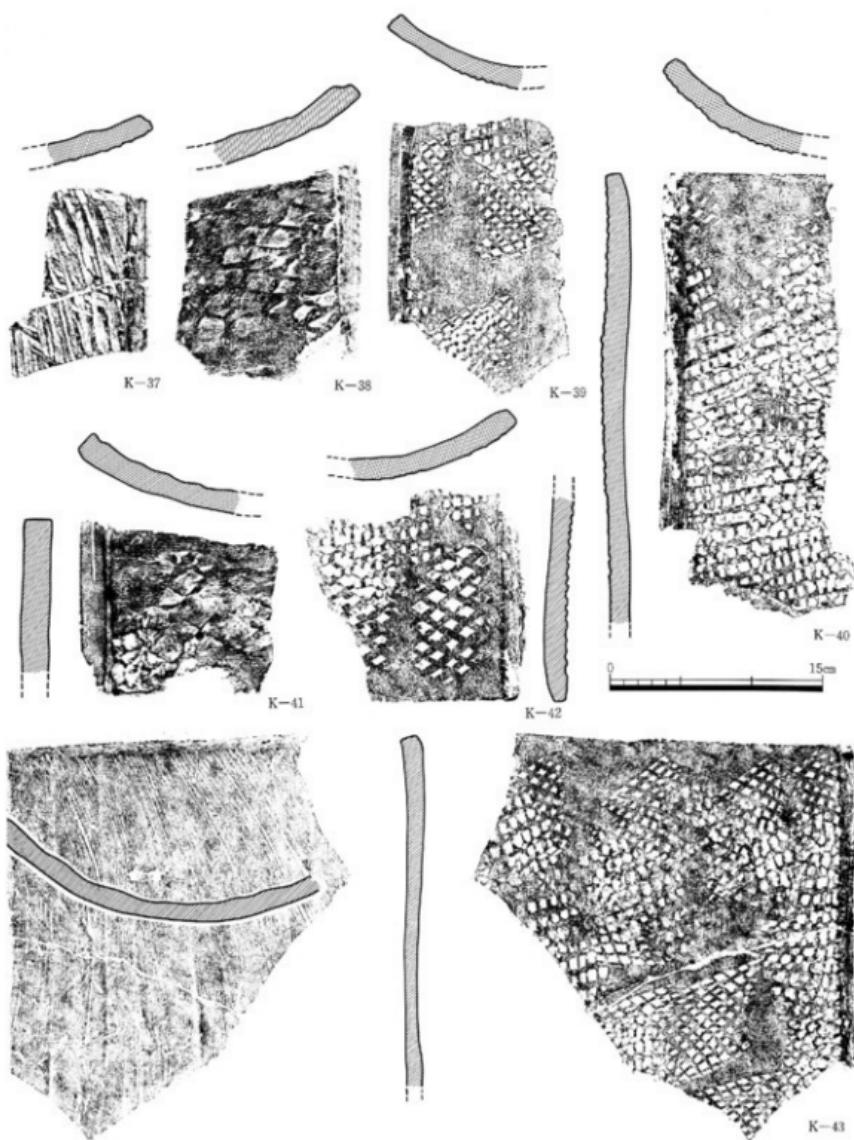


0 5 10 15cm

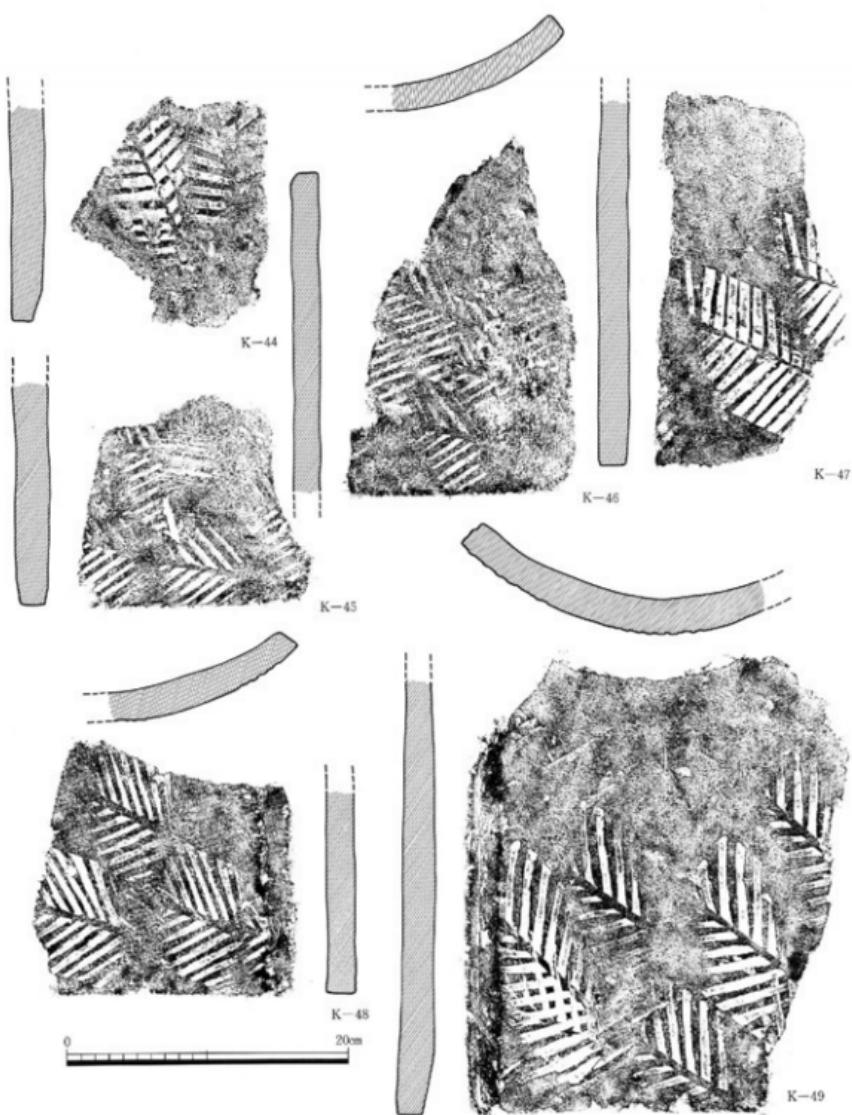
V型式K-19~K26 VI型式K-27 軒丸瓦実測図



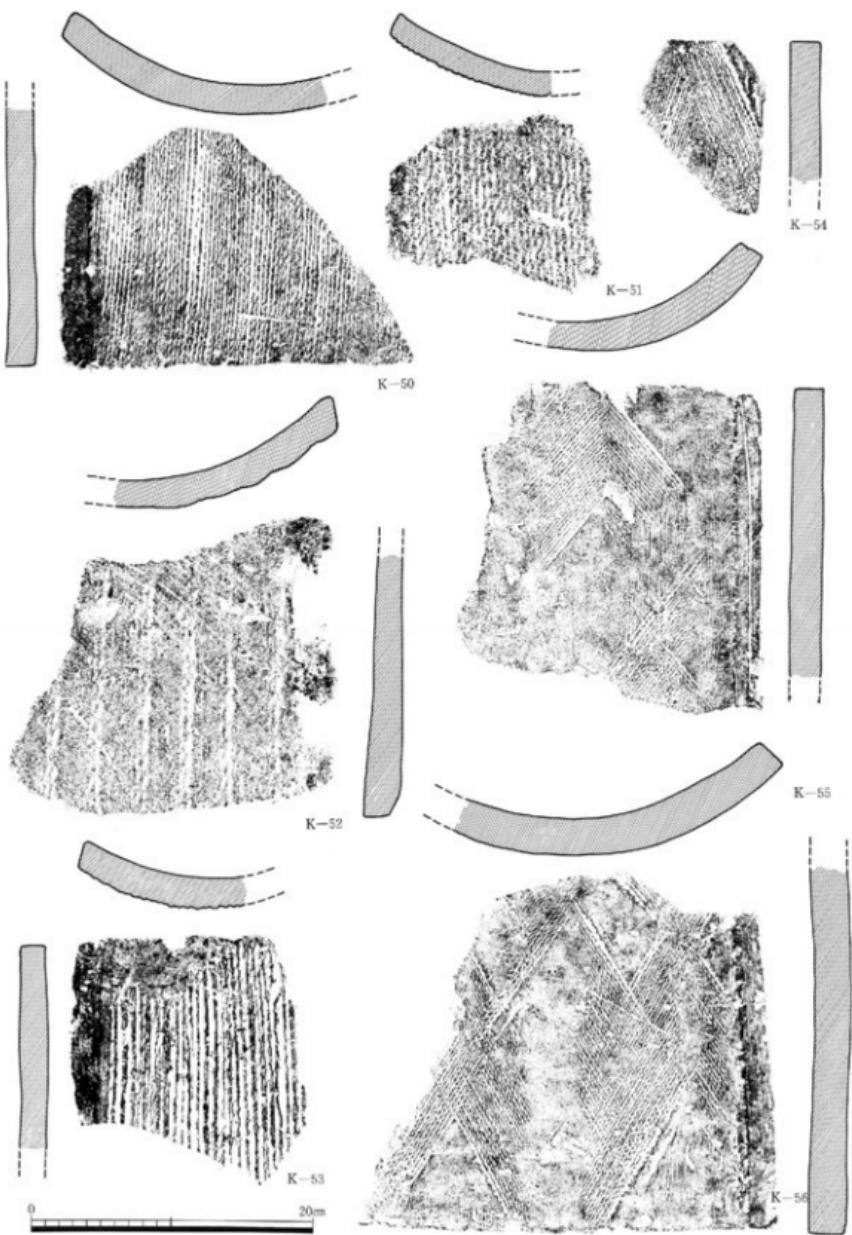
II型式K-32・K34 III型式K-29～K-31・K33・K36 軒平瓦実測図



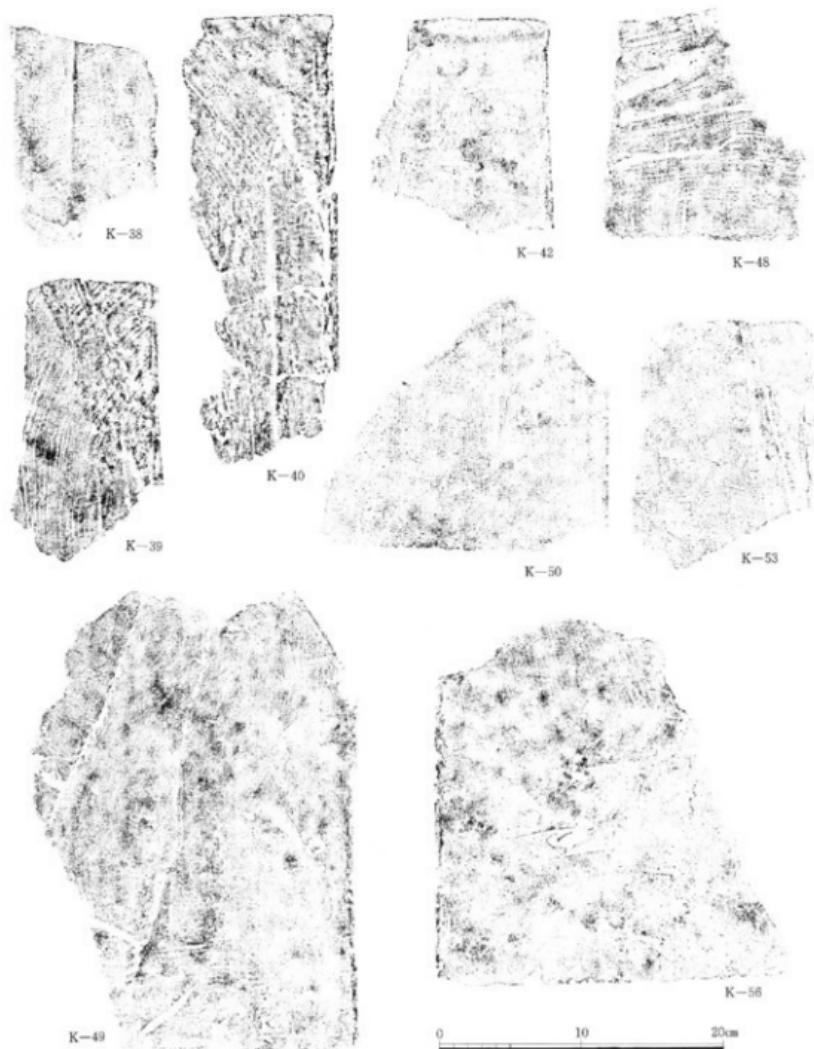
A類K-37 B類K-38~K43 平瓦実測図



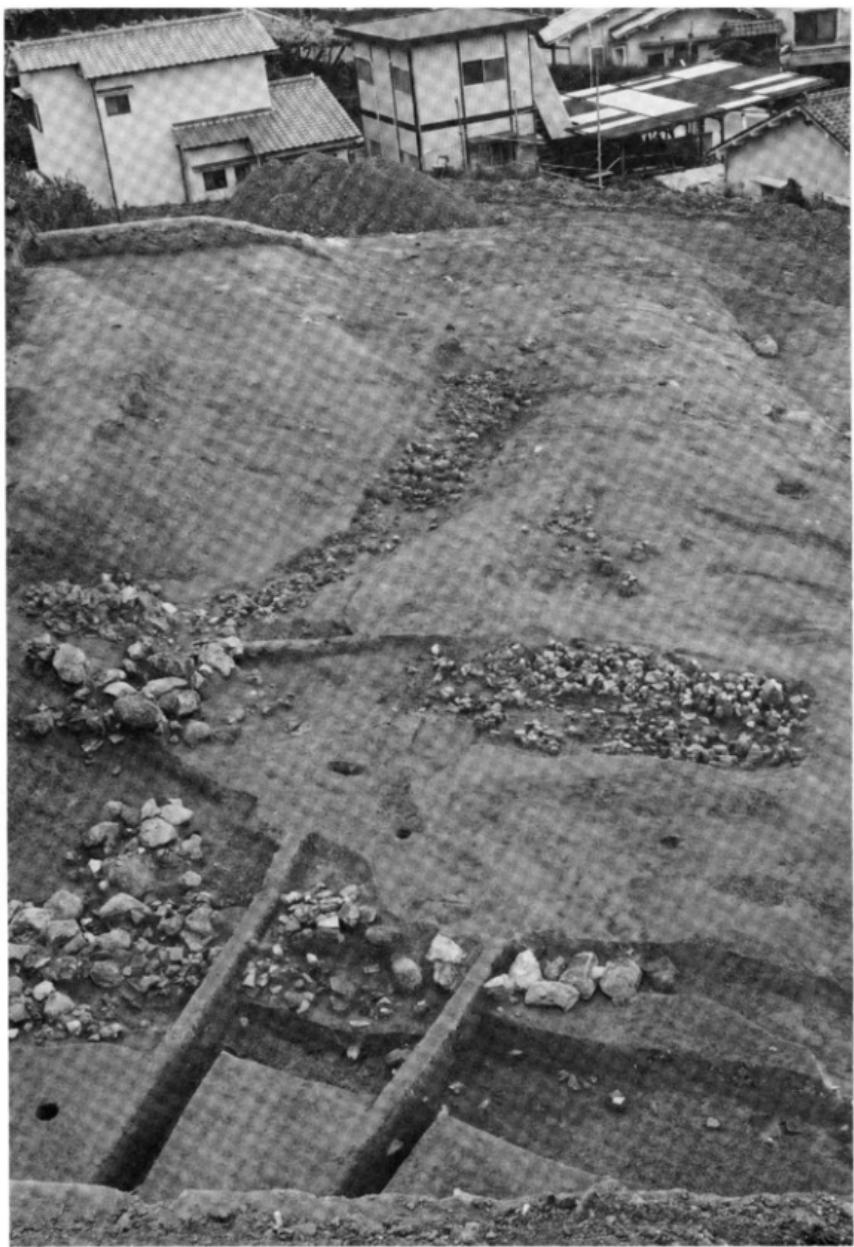
C類K-44~K-49 平瓦実測図



D類K-54~K-56 E類K-50 F類K-51~K-53 平瓦実測図



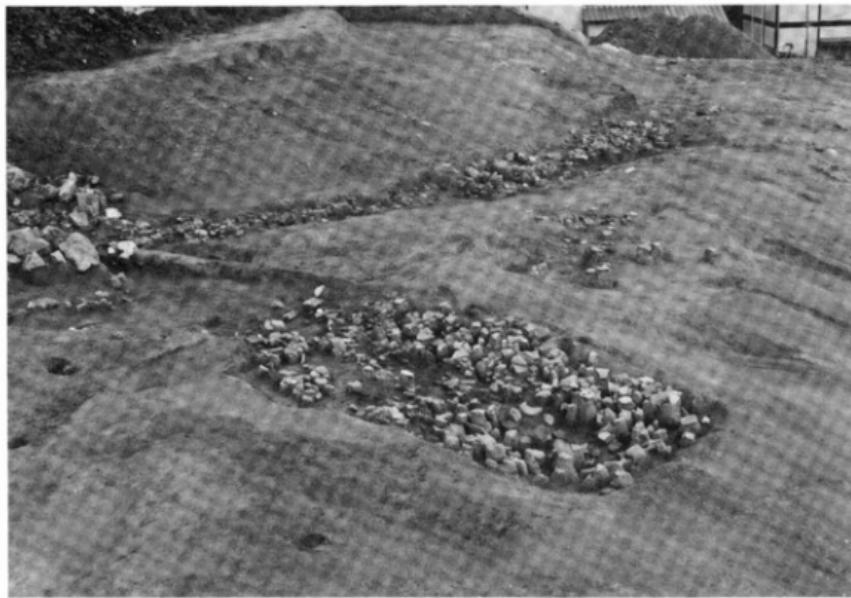
平瓦拓本



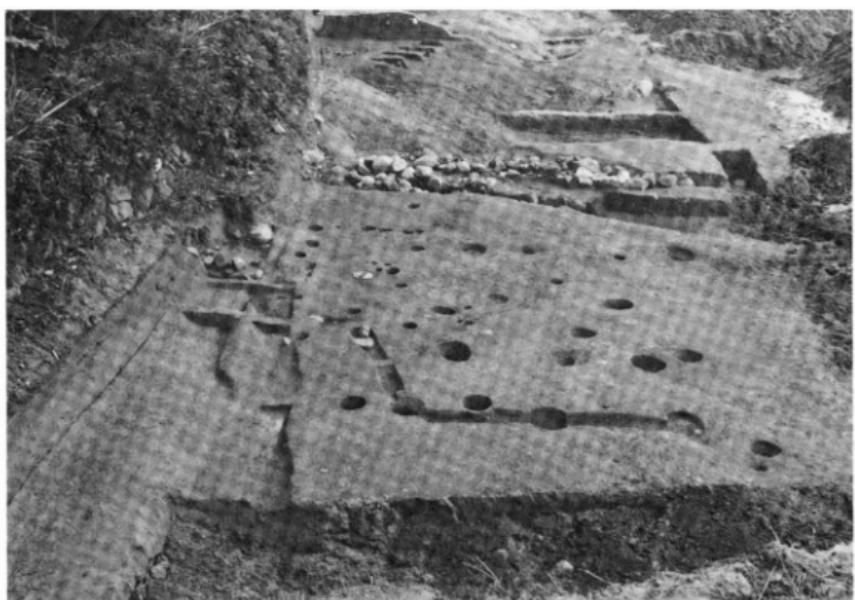
調査区全景



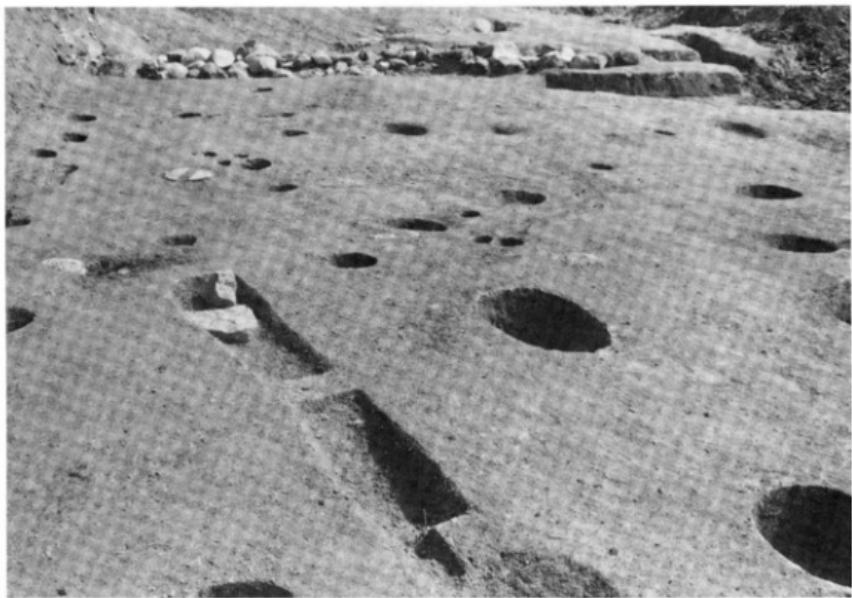
調査区全景（完掘後）



土坡 1



建物群全景（調査区北側）



建物 1



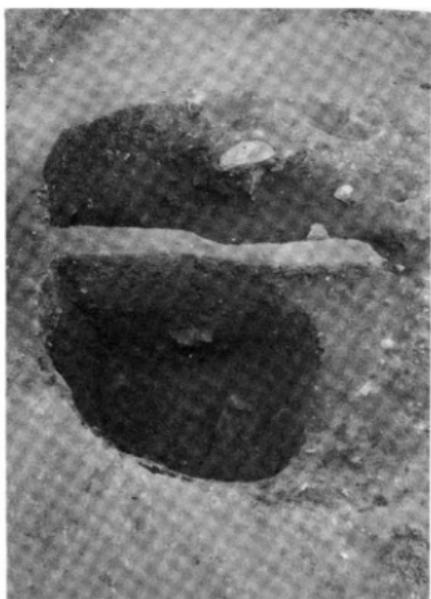
溝 1



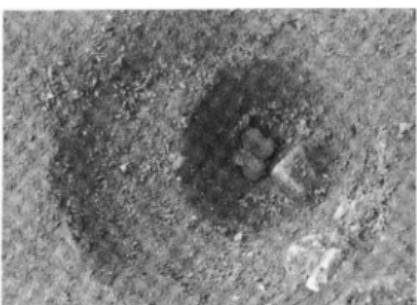
溝 2



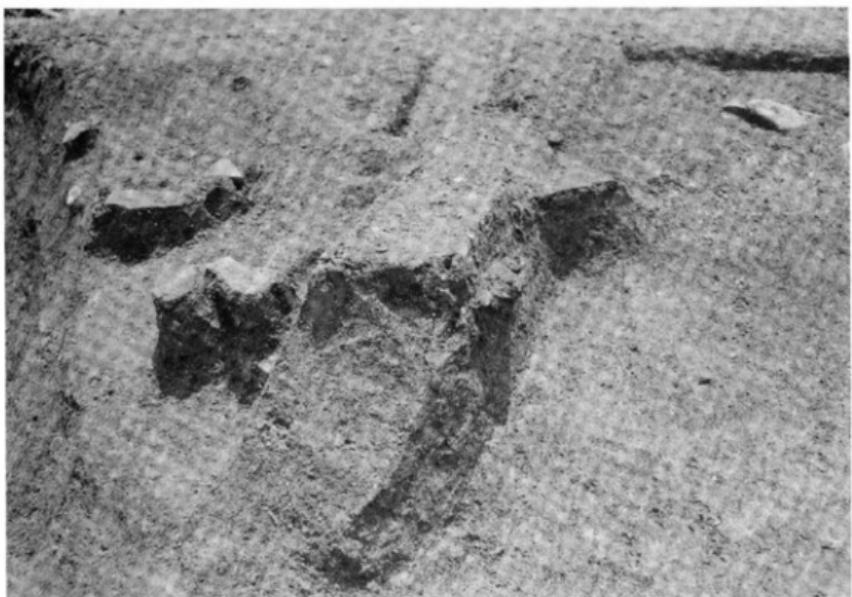
土塙 2



土壙 4



Pit



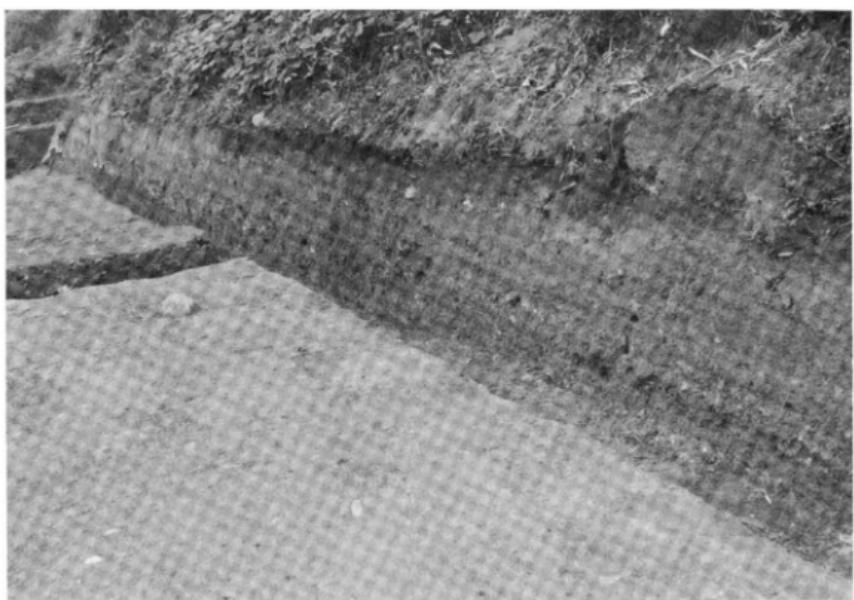
鉄滓・銅滓出土状況



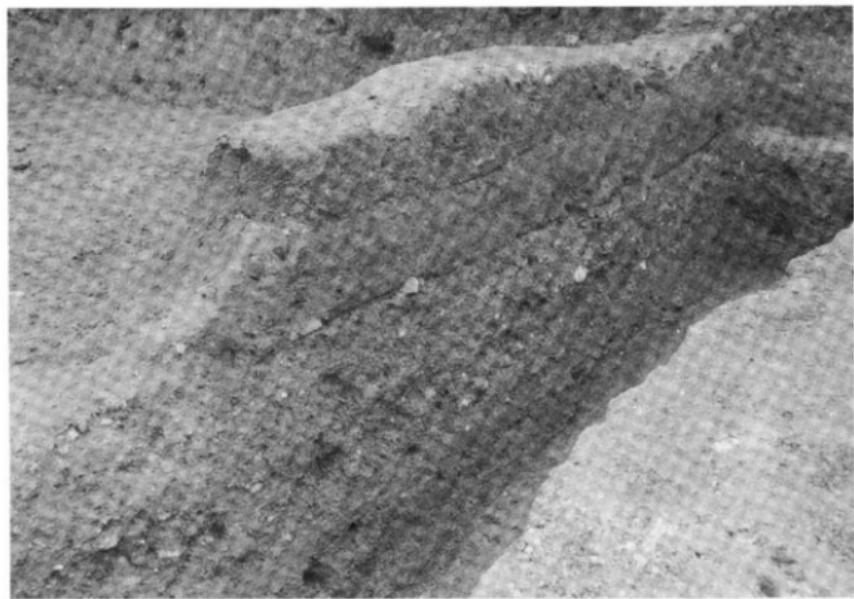
溝 2 內羽釜出土狀況



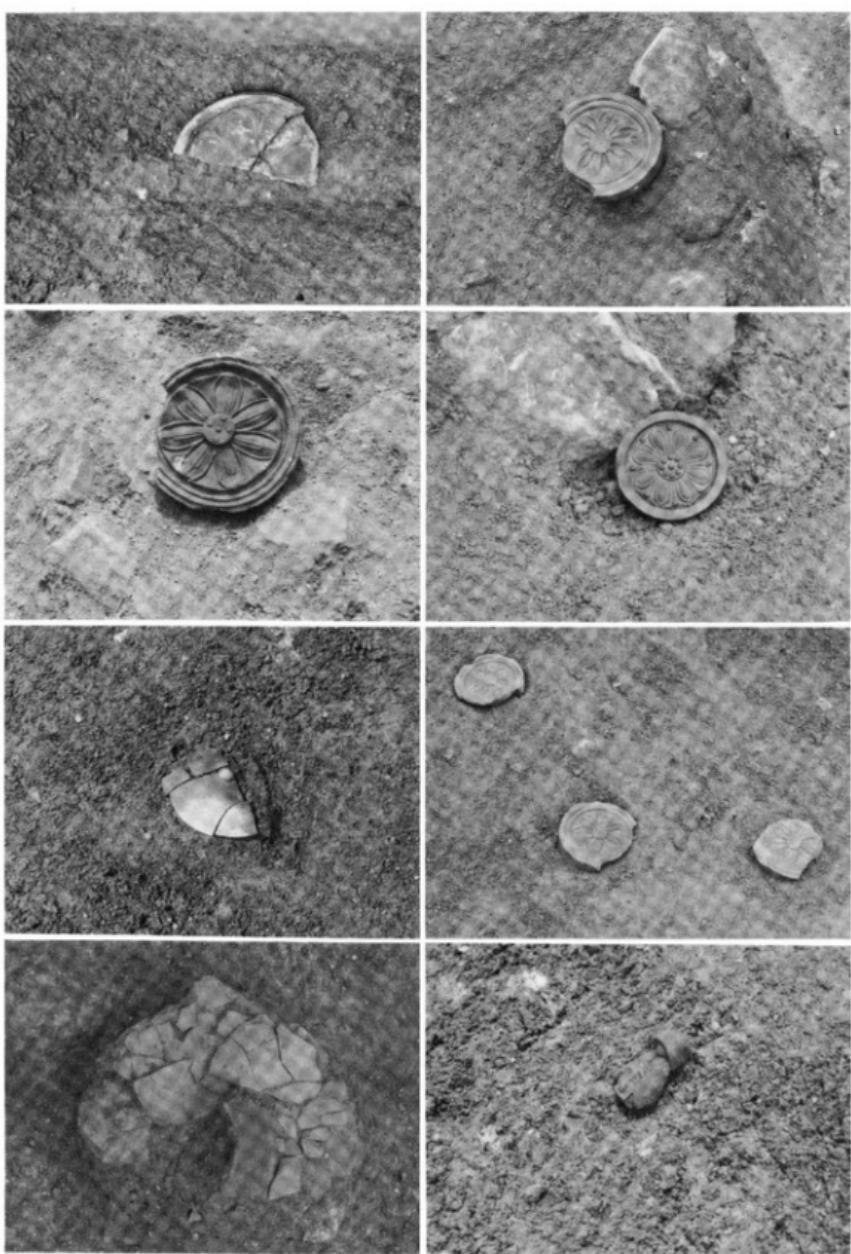
2 次堆積層



整地層（南北斷面）



整地層（東西斷面）



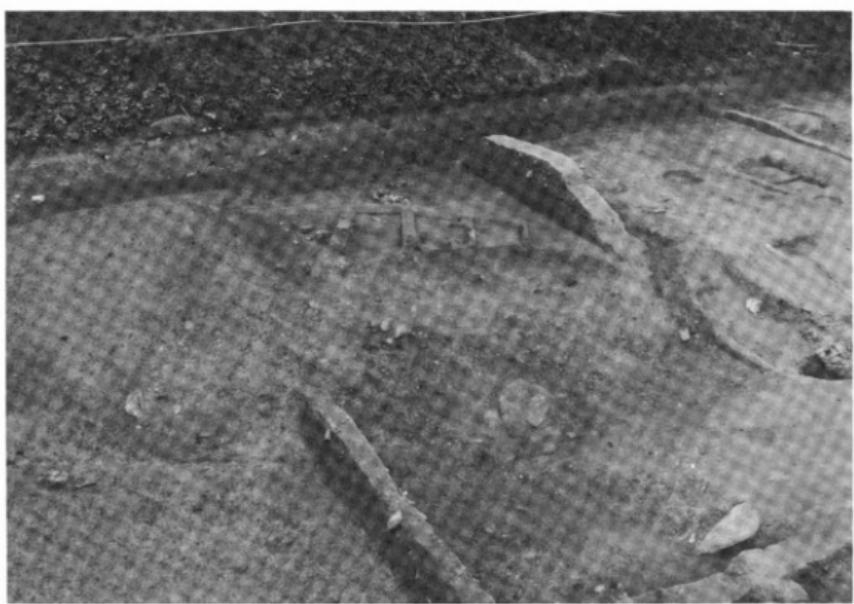
各種の遺物出土状況



1号墳全景



遺物出土状況



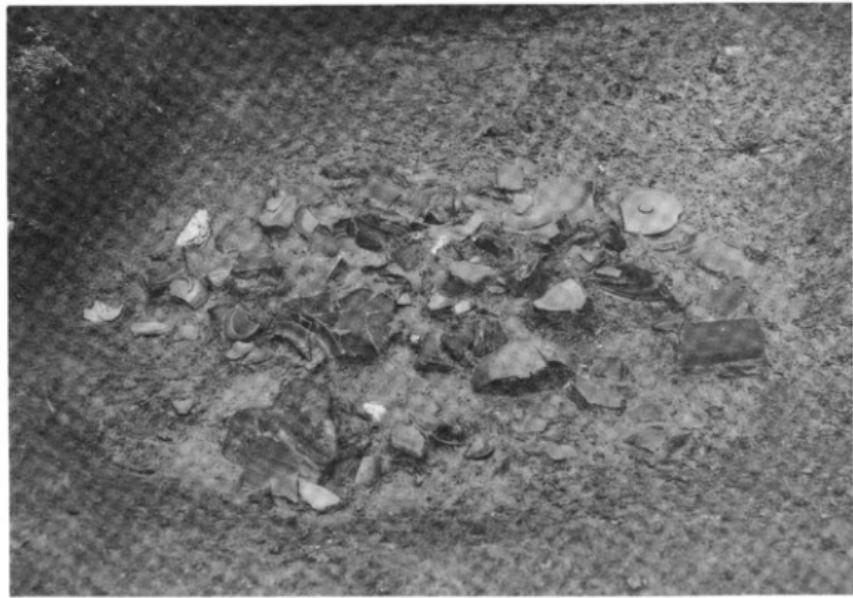
谷状遺構（北西から）



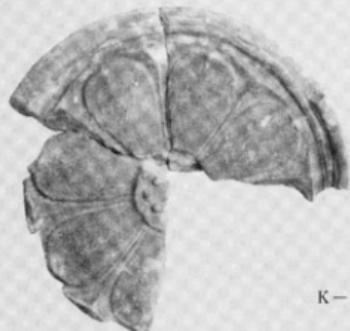
谷状遺構（北から）



土塹4（北より）



土塹4（南より）



K-1



K-7



K-4



K-10



K-5



K-16



K-13



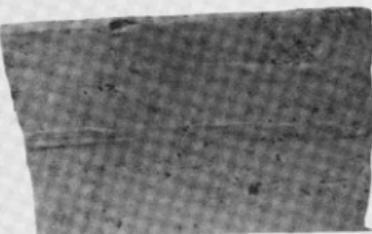
K-22



K-29



K-19



K-59



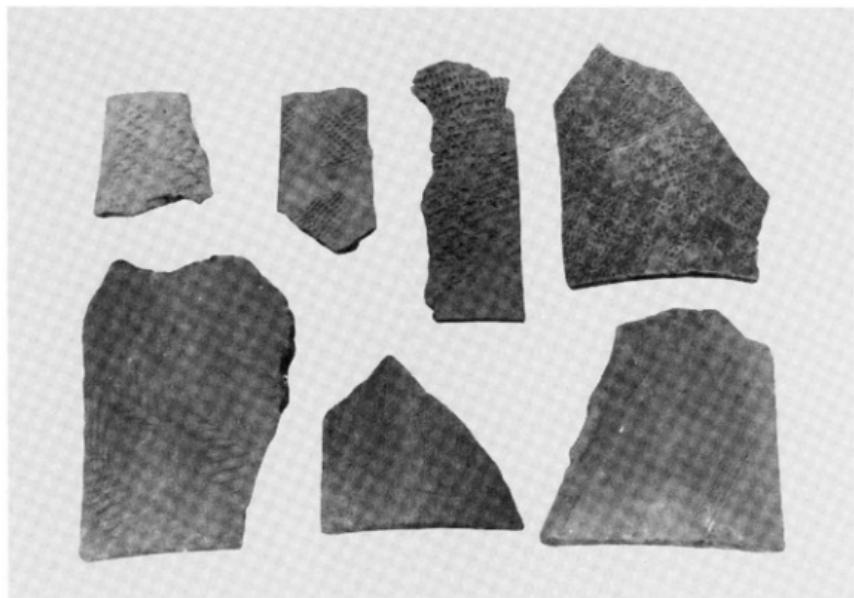
K-25



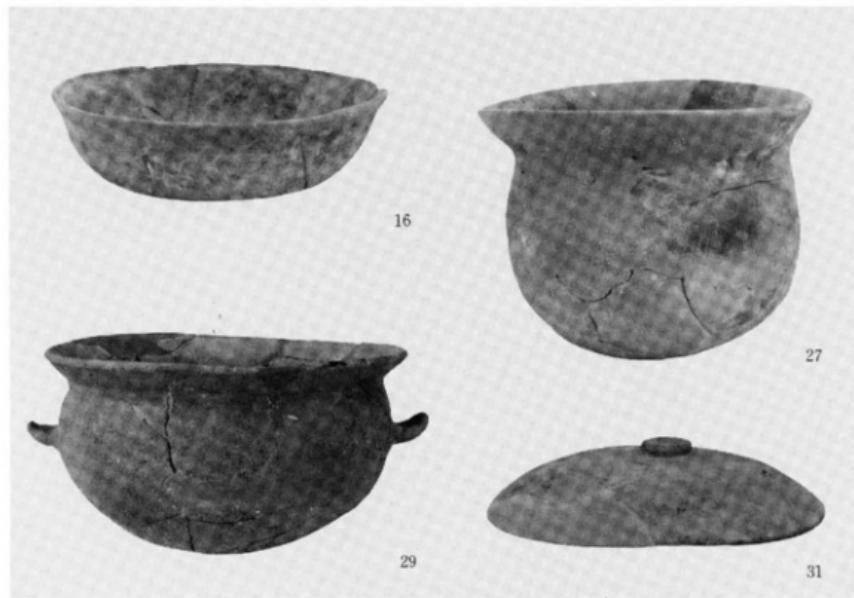
K-30



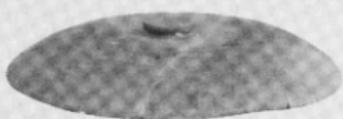
瓦類 軒丸瓦K-22~K-25、軒平瓦K-29・K30、鶴尾K-59



平瓦



土器、土坡4出土16~31



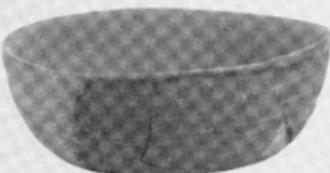
32



53



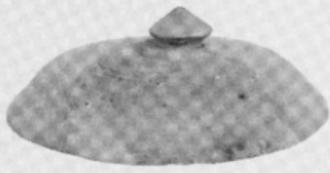
35



55



37



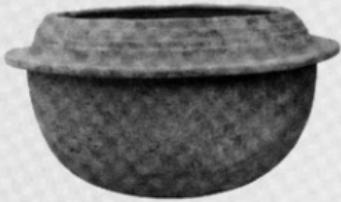
60



38



44



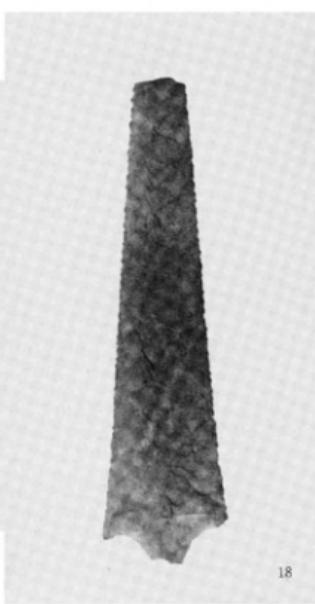
91



1号墳出土器



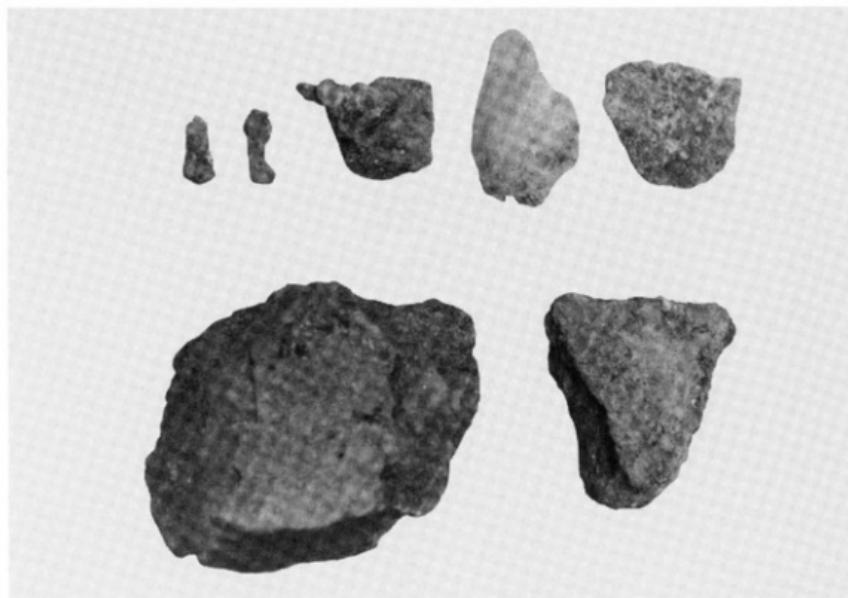
17



土製品

18

有舌尖頭器



鐵治開連造物

大 県 南 遺 跡
—山下寺跡寺域の調査—

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪市柏原市安堂町1番43号
電話 (0729) 72-1501 内 716
発行年月日 昭和60年3月
印 刷 K.K 中島弘文堂印刷所

